第六章　生活行為向上マネジメントによる通所事業利用者の地域参加に関する調査研究事業

Ⅰ．事業目的

平成21年度に通所リハビリテーションにおいて生活行為向上マネジメント(作業聞き取りシートや作業遂行アセスメント,作業遂行力向上プラン)を実践し,その効果を検証した結果,生活行為向上マネジメントにより高齢者が生活行為や余暇など包括的な作業を主体的・積極的に展開するようになるという効果を得た.

今年度は前年度介入した事例および通所リハビリテーション事業所の取り組み状況について追跡を行い,地域活動への展開の可能性について検討する.

また,新たな通所事業所において生活行為向上マネジメントを実施し,その効果について検証する.平成21年度事業には,対照群を用いた効果検証を行い,一定の効果を示すことができた.したがって,本年度は対照群を設けず,新しく協力を得た施設において作業療法士が生活行為向上マネジメントを対象者に対して効果的に活用できることを示す.加えて,通所事業所に務める作業療法士が,通常業務において生活行為向上マネジメントを良好に実践できるための検討を行い,通所事業所で活用できるマネジメントツールを作成する.

Ⅱ．事業内容

１.追跡調査

１）　平成21年度の介入事例について下記の調査および評価を行う.

実施にあたり,対象者・家族に対する倫理上の配慮として,研究の目的,事例報告の方法,利用範囲,取りやめの自由,人権擁護と個人情報の保護などを記載した書面で説明を行い,同意を得た者に対し実施した.

評価）基本情報,老研式活動能力指標,主観的健康感,Health Utilities Index

アンケート（協力施設のサービス利用を終了した方は,担当ケアマネジャからその後の活動状況について聞き取り）

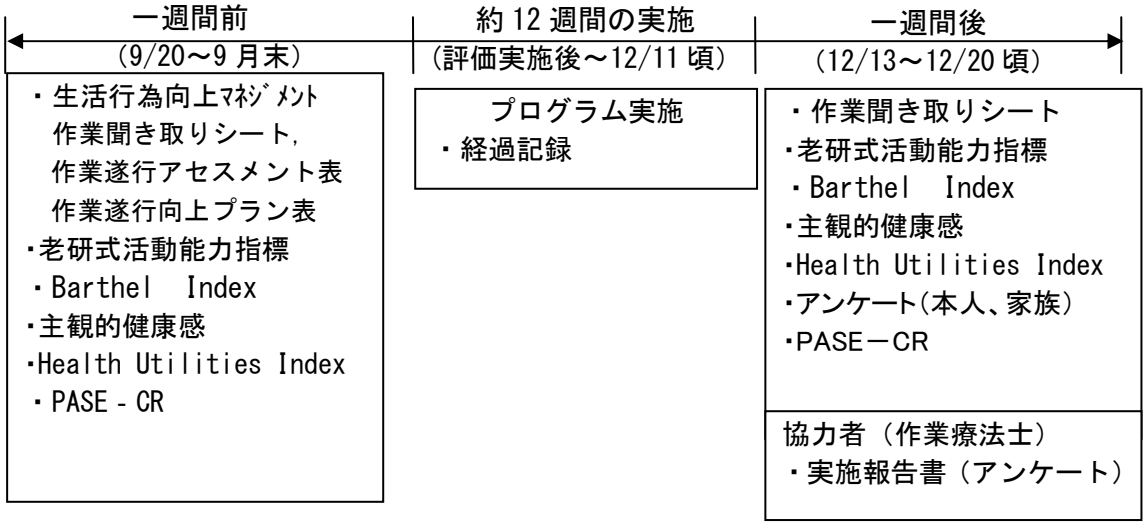
２）　協力施設の事業終了後の作業療法,施設スタッフ,施設環境面や地域への活動の展開状況についてのアンケート調査を実施.

２.新たな通所事業所における介入検証

１）　新たな通所事業所に生活行為向上マネジメントを用いた介入の協力を依頼する.

介入対象者は要支援１，２,要介護１，２，３の者とし,1施設7名程度,約100名とした.

対象者本人・家族に対する倫理上の配慮として,研究の目的,事例報告の方法,利用範囲,取りやめの自由,人権擁護と個人情報の保護などを記載した書面で説明を行い,同意を得た者に対し実施した.



２）事業終了後,通所事業における今回の取り組みとそこから見えたこと,通所事業所において活用できる生活行為向上マネジメントへの改編について,協力者から報告,意見を聴取する.

Ⅲ. 実施期間

１.追跡調査

平成 22 年 10 月～12 月

２.新たな通所事業所における介入検証

平成 22 年 9 月～12 月末

Ⅳ. 結果とまとめ

１. 追跡調査

１） 調査協力施設およびアンケート回収数

	協力事業者名	平成 21 年度		平成 22 年度追跡調査	
		介入群	最終結果回収数	ｱﾝｹｰﾄ回収数	備考
1	涼風苑	8	8	6	
2	せんだんの丘	7	6	6	
3	ひもろぎの園	7	6	5	
4	通所リハ TRY	10	8	9	全員利用終了のため,ケアマネに依頼
5	鴻池荘	5	4	0	個々ケースの追跡困難.事業所ｱﾝｹｰﾄのみ
6	福久ケアセンター	8	8	7	
7	げんきのでる里	10	6	8	
8	アゼリアホーム	8	8	5	
9	津名白寿苑	3	3	2	事業所アンケートなし
10	ペアレント	8	8	8	
11	しょうわ	13	11	11	事業所アンケートなし
データ計		87	76	67	

２）結果

追跡調査を行った 11 施設における介入群のうち 42 例について,1 年後の基本情報,老研式活動能力指標,主観的健康感,Health Utilities Index を得ることができた.また,今回は対照群の 1 年後のデータ収集を目的とはしていなかったが,1 施設において対照群 11 例のデータを得ることができた.その結果を示す.

（１）対象者の特性

		介入群（n=42）		対照群（n=11）		p 値
年齢		73.1±9.6		85.1±5.2		0.000
性別（男性／女性）		23／19		4／7		0.327
配偶者（あり／なし）		14／27		7／3		0.070
家族構成		2.0±1.3		1.3±1.0		0.128
要介護度	要支援 1	3	3	2	0	
	要支援 2	8	8	4	3	
	要介護 1	5	8	2	4	0.432
	要介護 2	11	11	2	3	0.726
	要介護 3	13	8	1	1	
	要介護 4	0	1	0	0	
	要介護 5	2	0	0	0	
寝たきり度	正常	1	0	0	1	
	J1	13	4	5	3	
	J2	8	6	1	2	0.058
	A1	8	7	0	2	0.113
	A2	1	9	1	1	
	B1	3	10	4	1	
	B2	8	0	0	1	
痴呆自立度	正常	21	17	7	3	
	Ⅰ	11	9	2	4	0.840
	Ⅱa	9	8	2	2	0.321
	Ⅱb	0	1	0	2	
	Ⅲa	1	1	0	0	
通所リハ回数		2.1±0.9		2.2±1.3		0.400

*2 群の比較には対応の無い t 検定もしくは χ^2 検定を適用
（p 値は上段が初期時，下段が追跡時を示す）

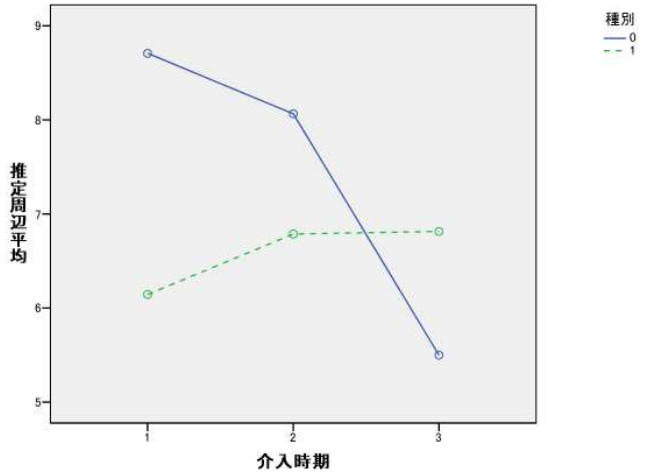
（２）アウトカム指標の変化

	介入群（n=42）	対照群（n=11）	p 値
	6.1±2.9	8.9±4.0	
老研式活動能力指標	6.8±2.8	8.1±4.2	0.004
	6.9±3.3	5.1±4.9	
	3.3±0.7	3.0±1.0	
主観的健康感	2.6±0.8	2.9±1.0	0.237
	2.7±0.7	2.9±0.8	
	0.33±0.33	0.62±0.20	
Health Utilities Index	0.39±0.26	0.56±0.28	0.032
	0.38±0.23	0.31±0.20	

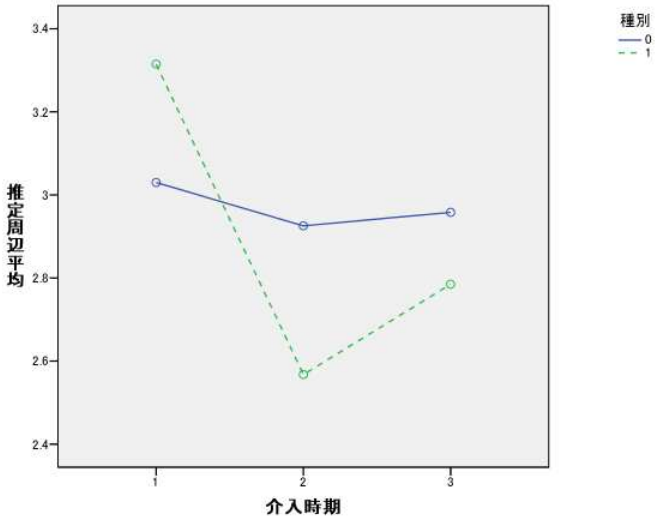
＊データは上段が初期評価，中段が最終評価，下段が１年後の追跡評価
＊統計は反復測定の分散分析（介入時期と群分けによる効果判定のため），年齢を共変量

データが少ないことと，そのことによるデータの偏りがあるため，十分信頼できる解析結果とは言えないが，両群における差が認められている．老研式活動能力指標および，Health Utilities Index では対照群において，介入後１年の間に悪化したのに対して，介入群の方が有意に維持された．

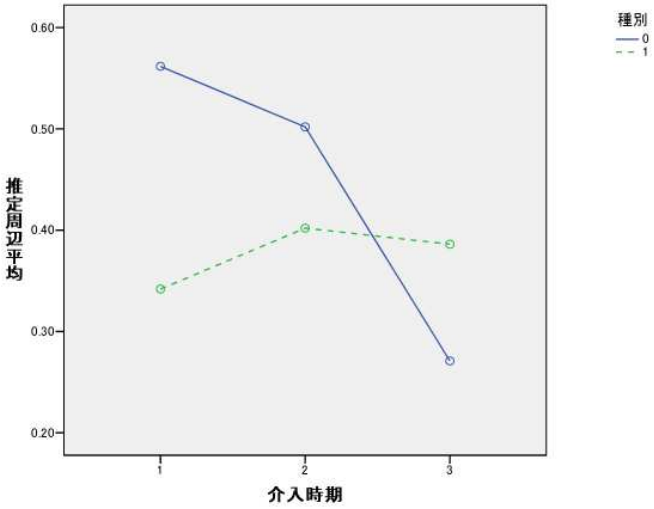
老研式活動能力指標の変化



主観的健康感の変化



Health Utilities Indexの変化



（３） アンケート結果

① 介入群対象者へのアンケート結果（n=67）

ｉ）昨年度作業療法士とともに立てた目標とする作業への意識

いつも意識	時々意識	あまり意識していない	全く意識していない
29 (43.3%)	23 (34.3%)	13 (19.4%)	2 (2.9%)

ⅱ）新たな目標への取り組み

取り組んでいる	以前はしていたが、今はしていない	取り組んでいない
28 (41.8%)	8 (11.9%)	31 (46.3%)

ⅲ）事業１年後の体の変化

よくなった	少し良い	変わらない	少し悪い	悪い
5 (7.5%)	17 (25.4)	37 (55.2%)	7 (10.4%)	1 (1.5%)

ⅳ）事業１年後の気持の変化

よくなった	少し良い	変わらない	少し悪い	悪い
3 (4.4%)	24 (35.8%)	35 (52.2%)	4 (0.7%)	0

ｖ）事業１年後の生活の変化　　（1名回答なし）

よくなった	少し良い	変わらない	少し悪い	悪い
5 (7.4%)	12 (21.1%)	40 (59.7%)	8 (11.9%)	1 (1.5%)

ⅵ）事業後に新たに参加するようになった活動の場所の有無

あり	なし
16 (23.8%)	51 (76.1%)

（ありのうち４件は「他の通所リハへの利用」と回答）

（参加場所）
買い物, 親戚の家への外出, 組合の話し合い, パークゴルフ, 家の周りの散歩, 琴の教室
建築士会の総会, 自治会, ドックカフェ, 美術展, 人ごみに出る, 旅行, 七宝焼き

② 施設アンケート結果（9 施設）

ｉ）検証事業終了後の生活行為向上マネジメントシートの活用

している	していない
6 (66.7%)	3 (33.3%)

◇活用方法　　施設利用者全員に利用：2 施設
生活行為向上マネジメントが必要と思われる一部の利用者に利用：2 施設
→・家族, ケアマネの協力が得られやすい方
・ニーズの達成の可能性（意欲的）のありそうな方
・新規の利用者で具体的な目標を持っている方
・自ら具体的な目標を確立され作業療法士に依頼のあった方
・趣味的活動を導入し利用時間を有意義に過ごして欲しいと感じる利用者
マネジメントの考え方（望む暮らし, 意味のある活動）を本人の言葉でリハニーズとして挙げ, プログラムを基礎, 基本, 応用, 社会参加の 4 つのフェーズでの表現を試用.
◆課題　本事業の目的でもあった「ケースの意識変化」へ働きかけるアプローチにまでは至っていない.

◇使用している生活行為向上マネジメントシート（複数回答）
・作業聞き取りシート, アセスメント表, プラン表：2 施設
・アセスメント表のみ：1 施設
・興味関心チェックリスト：4 施設
・元気ができる申し送り表（必要時のみ）：1 施設
・事業で作成したものを一部改編して活用：4 施設

ⅱ）通所リハにおける作業療法における対象者への関わりの変化

あり	なし
6 (66.7%)	3 (33.3%)

◇「あり」の内容
・作業療法士アプローチとチームリハサービスの関連がみえやすくなった. 作業療法士スタッフの中に, 基礎, 基本, 応用, 社会参加というプログラムの階層性と連続性が意識されつつある.
・よりアクティビティ（実践場面）に重点を置いた作業療法士を行うようになった. 施設内に留まらず, より外（活動の場）に目を向けた作業療法士を行うようになった.
・1 つ目の目標が達成できなかった方が, その後もう 1 つの目標を達成できた. 利用者自ら新しい目標活動を見つけ出し達成できた.
・料理実習の参加だけでなく, 企画, 実施, 進行など役割を持った参加に変化した.
・できるだけやりたいことにチャレンジできるような視点で関われるようになった. 目標を具体的にしようと努力している. 自宅でもよく動かれるようになった. 自宅で継続できる活動を開始された. 陶芸などやってみたいという希望を言われるようになった.
・11 月に開設されたサテライトにおいて, ご本人の主体的な目標を意識した関わりに重点をおいて提供している. また作業療法士が面接することの重要性を作業療法士自身が理解し, それが行える業務スタイルを構築しつつある. しかし業務量の問題から, 目標への段階付けについては事業を行った内容よりも具体的でないケースが多い.

◇「なし」の理由
・調査の経過を通して必要性は理解したが具体的な動きにまで発展していない.

ⅲ）作業療法士以外の職種の変化

あり	なし
5 (55.6%)	4 (44.4%)

◇「あり」の内容
・事業で立ち上げた吹き矢や希望であがった居酒屋活動を実施.
・作業療法士と共同してリハを進めていこうとする意識がより高くなった. 積極的にアクティビティをリ

ハとして捉えるようになり,ケアワーカー（CW）なりに評価の視点をもって利用者に関わるようになった.

・作業活動への関心が高まり,作業療法士としての介入の方法など学ぶことができた.

・事業所全体で生活行為向上マネジメントの考え方,評価の仕方を勉強し,CW,Nrs,PT もカンファレンス時に使用していく予定.聞き取りシートの改編版は 1 年以上使用している.うまく聞き取れるよう時々振り返りをしている.

・職員が援助しすぎることで,利用者の目標が定まりにくいのではないかという発想から通所リハ利用中の自主性・主体性を引き出す関わりを行うよう,介護職員の意識改革を行った.

◇「なし」の理由

・事業に協力しただけで自分達で活用しようとする意識には至っていない.

ⅳ）事業所内で利用者が行う作業療法士以外での作業活動の変化

あり	なし
5 (55.6%)	4 (44.4%)

◇「あり」の内容

・介護スタッフが作業提供時に準備力,企画力にポイントを置くようになった.

・レクメニュへの参加が増えた.

・提供するアクティビティメニュにバリエーションを持たせ,アクティビティを以前に増してリハのひとつとして取り入れるようになった.活動の場についても施設外を積極的に利用するようになった.

・利用する意識づけのため,利用者向けの講習会を毎月実施している.

・憩いの部屋（コーヒー,談話）,外食ツアー（家族とともに外食する会）を実施.

・様々な「お試し」の活動が利用所内に散在していることで,利用者が目標（したいこと）を探し出しやすくなると考え,利用中のプログラムを再構築した.このプログラムの実施も基本的には介護職員で担っている.

ⅴ）利用者の変化

生活行為向上マネジメントで介入した利用者に変化がみられた	事業所全体の利用者に変化がみられた	事業介入直後と大きく変わらない
5 (55.6%)	3 (33.3%)	1 (11.1%)

◇変化の内容

「生活行為向上マネジメントで介入した利用者に変化がみられた」場合

・介入時の目標,活動などを継続して行っている.新しい目標をみつけ行っている.実行まではできていないが,意識はされている.

・在宅での訓練中,活動に積極的に取り組む姿勢も強くなり関心が強くなった.実際に活動量も増えた.

・自宅での役割（料理）が確立した方がいる.家族の介助方法指導が定着された人もいる.

・自宅でもよく動かれるようになった.自宅で継続できる活動を開始された.陶芸などやってみたいという希望を言われるようになった.

「事業所全体の利用者に変化がみられた」場合

・利用者が主体的にアクティビティに取り組むようになってきた.家族も施設外のアクティビティ実施などについて積極的に協力,理解をしてもらえるようになった.

・自主的に動こうという雰囲気が自然に作られた.他施設に行った人が「自主的に動くと怒られる」と他のやり方に不満を持ち,自立心が育って終了したことが感じられた.

・その後,通所リハで小集団として行われていた活動（大正琴）に自ら興味を持ち,自宅でも行なう趣味へとつながっていった.これらのプログラムにより利用者全体的に変化が現れ始めている.

vi）利用者や施設における新たな作業活動の場の創造や他機関における作業活動の場へのつながり

あり	なし
7 (77.8%)	2 (22.2%)

◇「あり」の内容

・近隣にある介護予防通所事業所の活動に一般の方に交じって参加されるようになった（パークゴルフ,日帰り旅行,ipad 教室など）.

・通所で行っている美術クラブの作品を街中のビルの中に展示させてもらえる機会を得た（一般の方も来ることができる作品の展示会が実現,今後も継続予定）.

・ホテルのランチバイキング,ボーリング,カラオケ,釣り堀など施設外でアクティビティの実施を通じて今後も施設外のアクティビティで利用可能な場所をたくさん見つけることができた.

・利用者がプールに行くようになった.

・吹き矢大会,試験外泊などやや活性化した.

・デイケアメニュー（料理,手芸,散歩など）への参加が増えた.

・施設内で自分の役割を持てたことで,自信となって活動の場が広がった人がいる.

・ボランティア活動として,他施設のイベントで活動のお披露目を行った.

・明確にあったとは言えないが,徐々に新たな活動の機会を導入している.

vii）生活行為向上マネジメント実施後の事業所内での変化（自由記載）

・作業療法士自身が作業療法士として何をすべきか,何ができるのかを考え,取り組むきっかけになった.

・シートは活用できていないが,利用者の目標など具体的に聞き出すように意識した.

・リハ実施時,応用練習が増えた.環境調整も多く行えた.

・デイケア利用時のリハメニューだけでなく,デイケア以外の時間でできる活動を効果的に考えたり,現在のメニュをより細かく具体的目標につなげる意識が高まった.

・作業療法士の作業提供内容が増えた（家事や園芸など）.利用者が何を望んでいるのか,どうしたらそれができるのかを考えまとめる機会ができた.

・以前よりしっかり利用者の方も含め「したいこと」「やりたいこと」の確認を多職種で話し合うようになった.

・変化したいという想いは持っているが,書式を使用する事,面接の時間を適時もうけることの時間的業務負担が大きく対応しきれない.実際はケースを絞って提供せざるおえないのが現状.

・リハスタッフ（PT,ST 含む）,通所リハスタッフ（看護,介護職）に生活歴の把握を行い,その内容から活動内容を検討して,利用者個々に合わせた内容を提示する行動を行っている.現状は利用者主体というよりは,介護者主体で利用させられている観がある.利用者が主体的に通所リハに通う目的となる活動,目的を作る事を意識した行動を行う.ケアマネにも活動内容を示し,ケアマネ,家族を巻き込んだ活動にする為に現在取り組んでいる.

４）　追跡調査結果のまとめ

（１）　昨年度研究事業とのデータ比較結果

今回の追跡調査においては,1 年後の比較データ数が少なく,またデータの偏りがあるため,十分な結果とは言えないが,老研式活動能力指標および，Health Utilities Index で対照群において，介入後 1 年の間に悪化したのに対して，介入群の方が有意に維持された.

生活行為向上マネジメントによる介入は 1 年後の IADL および健康関連 QOL の維持に効果があると考えられる.

（２）　介入群対象者のその後の状況

① 対象者の約 80%は,昨年度の介入時に目標とした作業をその後も意識して取り組んでおり,さらに約 40%の対象者は新たに別の作業についても目標を立て,現在まで取り組んでいたことが明らかになった.また,対象者の約 50%は体調に関して変化がなく,約 30%ではよくなったと回答していた.生活については,約 55%で変化がなく,約 30%ではよくなったと回答し,新たに活動の場が広がった対象者は 25%であった.気持ちの面では,約 50%の対象者が昨年と変わらないとし,約 40%はよくなったと感じていた.

昨年度の結果では,生活行為向上マネジメントを用いて利用者がしたいと思った作業を実際のプログラムとして実践した場合,利用者の実行度や満足度に改善がみられ,作業に焦点を当てたアプローチが通所リハビリテーションにおいて利用者の主体性や意欲を高めるために有効であることが明らかとなった.また,昨年度の研究協力者からは,作業に焦点を当てたアプローチにより,利用者のリハビリテーションに対する視点を機能訓練から生活重視へと変えることができたとの意見が聞かれていた.今回の結果は,生活行為向上マネジメントを用いた介入を経験したことによって,その後約 1 年経過した時点でも,対象者の主体性がある程度保持されていたことを示唆していると考えられる.

② 約 80%の対象者が,心身および生活の状態を維持またはよくなっていると感じていたが,今回の追跡調査では介入群のみを対象としているため,生活行為向上マネジメントを用いて介入したことの効果かどうかは不明である.しかし,他の項目に比べ,気持ちの面での改善の割合が高い傾向にあったことは,昨年の結果で介入群において主観的健康感が有意に改善していたことと関連がある可能性があると思われる.

（３） 協力事業所のその後の取り組み状況

① 昨年度行った研究の協力施設 9 施設のうち,6 施設では生活行為向上マネジメントシートを一部改編するなどして活用していた.また,6 施設においては提供している作業療法に変化がみられていた.その変化とは,目標設定がより作業に重点を置いて行われるようになったこと,プログラムが基礎・基本・応用・社会適応という階層性を意識して展開されるようになったなどである.昨年度の調査では,通所リハビリテーション事業所においては機能訓練に対するニーズが高く,応用訓練を実施できにくいなどの意見があったが,作業療法士自身が作業に焦点を当てたアプローチを意識したことにより,上記のような変化がもたらされたものと考えられる.

また,5 施設において,作業療法士以外の職種の変化があったと回答があり,作業活動を通したリハビリテーションへの理解が深まり,過介助の見直しや,利用者の能力を評価しながらの関わりが行われるようになったとの報告があった.これは,昨年度行った作業に焦点を当てたアプローチが,介入群に良い影響を与えたことが他職種にも実感されたためではないかと考える.

② 今回の追跡調査からは,生活行為向上マネジメントを用いて作業療法を実践することによって,対象者だけではなく,作業療法士自身や他職種にも意識や行動の変化がもたらされる可能性が示唆されている.今後,生活行為向上マネジメントの普及によって,より効果的なサービスの提供が可能となっていくものと考えられる.

（４） 生活行為向上マネジメントの活用による作業の広がりについて（図１）

作業療法場面以外での作業活動の広がりの有無に関しては,7 施設があったと回答し,提供するプログラムの充実と利用者の参加率の増加,利用者の活動範囲が施設以外の場へと広がったなどの報告があった.具体的には,利用者が主体的に取り組むようになり,陶芸教室や大正琴教室に参加するなどの趣味の広がりや,家で調理などの家事に取り組むなど IADL の広がりにつながった.また,本人が活動に意欲的に取り組むことで,消極的な家族の理解を得ることにもつながったという回答が得られた.施設でも施設内で行う活動が増え,施設外での活動の取り組む機会を設ける,通所利用以外の活動にも配慮するようになった.

これらの結果は生活行為向上マネジメントにより目標とする作業に焦点を当て,これまで困難であると感じていた作業が遂行できたことにより,さらなる活動への広がりを得たものと考える.

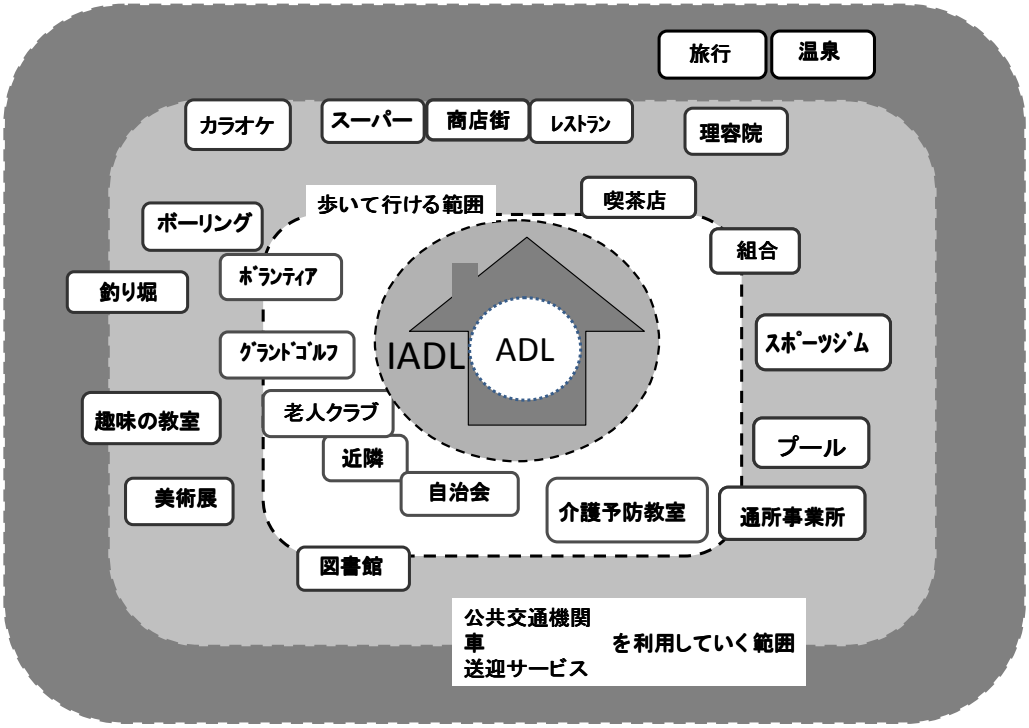


図.1年後の活動の広がり

５）今後の課題

今回の追跡調査から生活行為向上マネジメントを通所事業において永続的に活用していくための課題を見出すことができた.

（1）　1年後に生活行為向上マネジメントを何らかのかたちで実施していると回答した施設が多かったが,ツールの全てを利用している施設は少なかった.1年経過後,包括マネジメントツールをまったく利用していない施設もあり,その理由は書類作成時間がかかる,スタッフ間の意識が十分に行き渡らなかったためとしている.今後,通所事業所で活用できる生活行為向上マネジメントツールへの改良が必要であることが今回の結果からも言える.この点については,本年度,通所事業における新規事業において検討を行った（後述）.さらに生活行為向上マネジメントを通所事業所で活用できるための,運用面での意識づけ方法について検討していく必要があると考える.

（2）　さらに生活行為向上マネジメントツールを活用していない理由として,すでにある書類と重複するなどの課題があがった.一方で,すでにある書式に生活行為向上マネジメントを落とし込み利用している施設もあった.各施設の作業療法士が生活行為向上マネジメントの考え方を理解したうえで,各事業所で用いられている書式を工夫,改良し活用するなどの手法の提示が必要である.

（3）　生活行為向上マネジメントを実践するには,作業療法士が個別対応を行っている20分という限られた時
間では,面談による聞き取りやIADLアプローチを行うなどの時間が足りない.また,個別対応時間について利用者は身体機能に対する指導を希望しており,その時間を他のことへ利用することについての認識が十分ではないといった課題がある.中には他職種と協力して情報を得る,面談を行うといった工夫をしている施設もあった.生活行為向上マネジメントを作業療法士だけでなく他職種も実施できるための普及,研修が必要であると考える.また,通所事業所での対象者への関わりは利用時間すべてが作業の実践の場であるという認識を作業療法士をはじめとする全ての通所事業所のスタッフが持つこと,また利用者自身がそのような認識を持って利用するよう意識の変革が必要であると考える.

２．新たな通所事業所における介入検証

今回,新たに１５施設の協力を得て,生活行為向上マネジメントを活用した介入を行った.この介入については対照群を設けた比較検証をおこなっていないが,平成２１年度に行った同じ介入において,対照群を設けた介入を行い一定の効果を得た（平成21年度老人保健健康増進等事業 自立支援に向けた包括マネジメントによる総合的なサービスモデル調査研究報告書参照）.

１） 平成２２年度調査協力施設および対象者数

（人）

ID	協力事業者名	初期評価	最終評価
1	東京北社会保険介護老人保健施設さくらの杜	7	6
2	介護老人保健施設ハートケア市川	6	5
3	介護老人保健施設加古川白寿苑	5	5
4	三原デイケアクリニック　りぼん・りぼん	6	6
5	介護老人保健施設　希の里	6	6
6	介護老人保健施設　寿光園	7	6
7	介護老人保健施設みがわ	7	6
8	医療法人社団　八州会　袋井みつかわ病院	6	5
9	医療法人社団友志会リハビリテーション花の舎病院	6	6
10	医療法人社団　たかはら会　尾形医院	6	5
11	（株）メディケア・リハビリ	１０	１０
12	（有）なるざ	7	6
13	永生クリニック	7	6
14	せんだんの丘ぷらす	１０	１０
15	東郷外科はつらつデイケア	1	1
合計		９７	８９

１５施設において生活行為向上マネジメントの介入を実施し,初回97名の参加を得て評価を行ったが,内8名が途中で死亡または通所事業利用を中止したため最終89名の評価を行った.

２）結果

（１） 対象者の特性

		平均値±SE，度数
年齢		76.0±9.7
性別（男性／女性）		31/52
配偶者（あり／なし）		47/37
家族構成		1.9±1.5
生活保護（あり／なし）		0/87
要介護度	要支援 1	14
	要支援 2	13
	要介護 1	16
	要介護 2	29
	要介護 3	11
	要介護 4	3
	要介護 5	0
認知症自立度	正常	55
	Ⅰ	14
	Ⅱa	8
	Ⅱb	6
	Ⅲa	4

*再評価を完了した 87 名を分析対象とした.

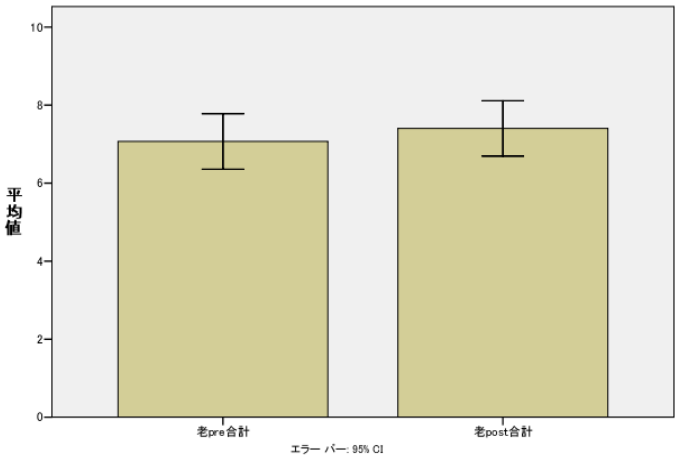
（２） アウトカム指標の変化

	初期評価	最終評価	p 値
老研式活動能力指標	7.1±3.4	7.4±3.3	0.063
主観的健康感	3.1±1.0	2.7±0.8	0.000
Barthel　Index	87.4±13.6	89.6±13.0	0.004
PASE-CR	9.3±6.4	11.0±7.0	0.001
HUI	0.37±0.28	0.44±0.29	0.000
HUI　視覚	0.91±0.13	0.93±0.12	0.034
聴覚	0.95±0.21	0.95±0.20	0.854
会話	0.92±0.19	0.93±0.13	0.193
移動	0.60±0.30	0.62±0.28	0.135
器用さ	0.81±0.23	0.84±0.20	0.019
感情	0.86±0.14	0.90±0.10	0.001
認知	0.79±0.24	0.81±0.24	0.174
痛み	0.82±0.17	0.87±0.13	0.005

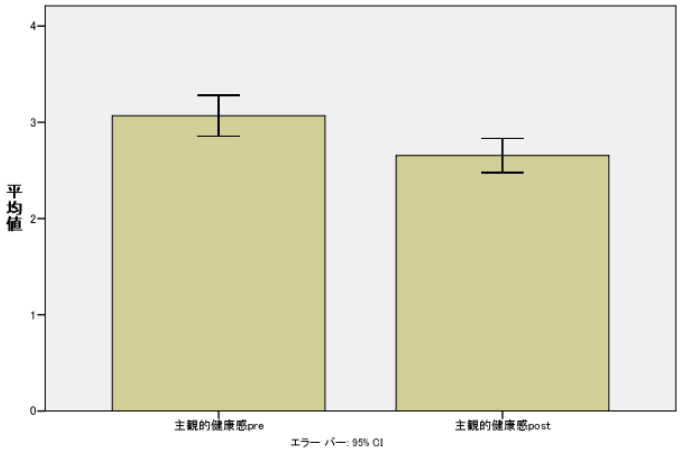
*統計は対応のある t 検定

老研式活動能力指標以外のアウトカム指標全てにおいて初期評価から最終評価までに有意な変化（改善）が認められた．HUI の下位項目では，「視覚」，「感情」，「痛み」の 3 項目に改善を認めた.

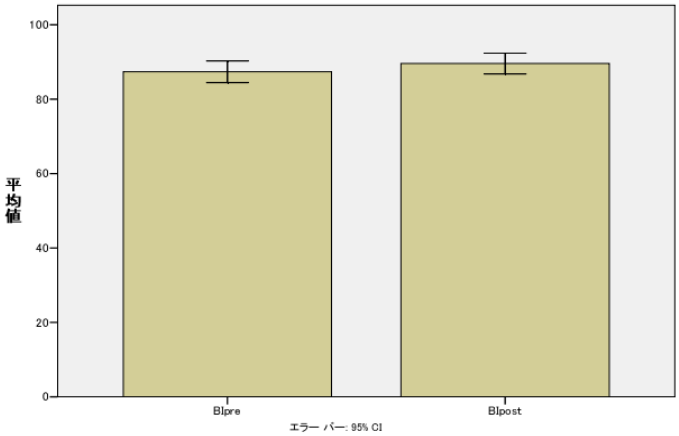
老研式活動能力指標の変化



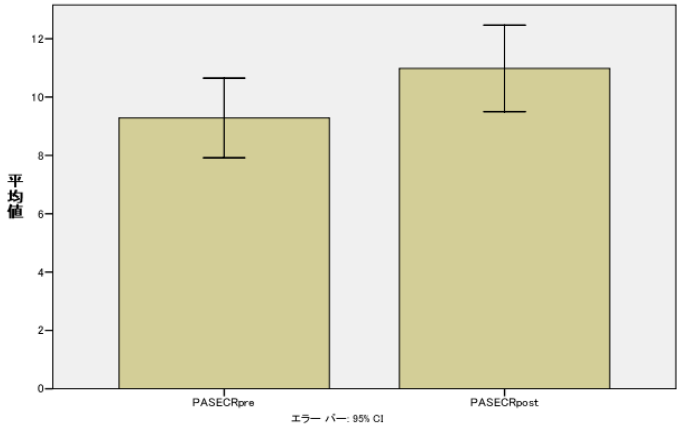
主観的健康感の変化



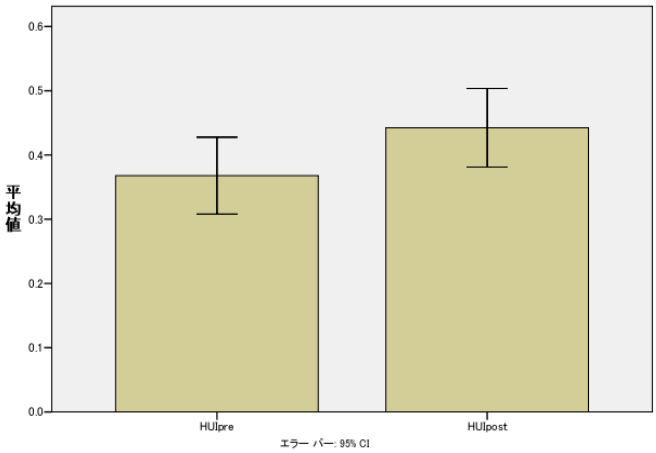
Barthe Indexの変化



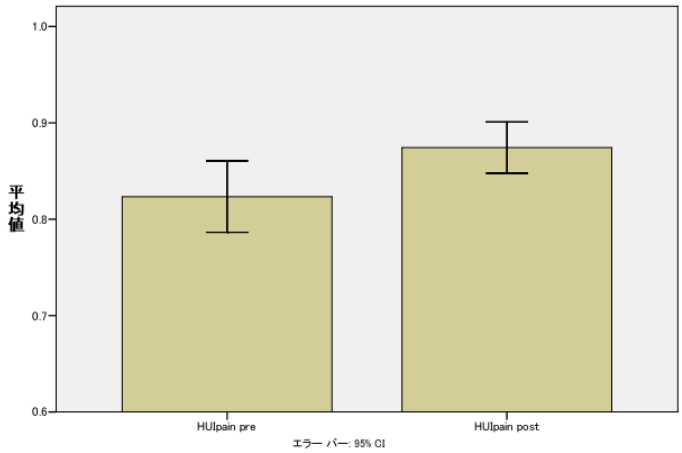
PASE-CRの変化

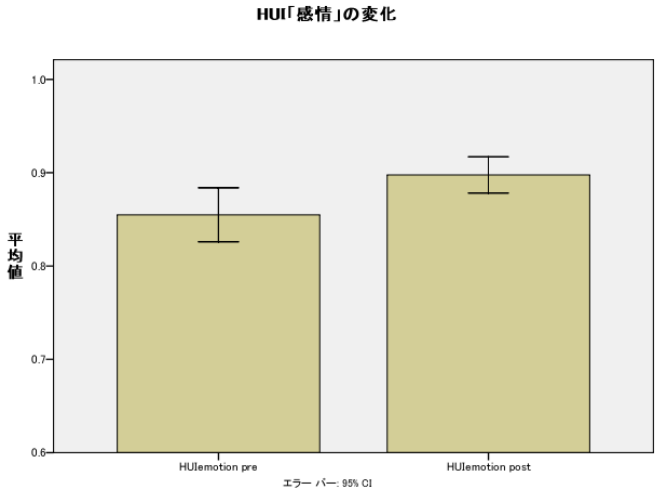


Health Utilities Indexの変化



HUI「痛み」の変化





（３）　ロジスティック回帰分析の結果

	B	有意確立	オッズ比	オッズ比の 95. 0%信頼区間 下限	上限
年齢	.007	.778	1.007	.958	1.059
要介護度	−.008	.973	.992	.624	1.577
初期老研式活動能力指標	.204	.098	1.227	.963	1.563
初期主観的健康感	.542	.036	1.720	1.037	2.853
初期 BI	−.010	.694	.990	.942	1.040
初期 PASE−CR	−.095	.050	.909	.827	1.000
初期 HUI	−.006	.673	.994	.967	1.022
定数	−1.747	.605	.174		

＊強制投入法．有意確率が 5%未満の説明変数を網掛けで示した.

HUI の改善の有無を従属変数にし，介入群の中でもどのような対象者で HUI の改善が得られたかを検討した.統計手法はロジスティック回帰分析の強制投入法で実施した（ステップワイズ法でも同様の結果が得られた）.

初期の主観的健康感のオッズ比が 1.7 と有意な値を示している.これは主観的健康感の数値が高い（健康感が悪い）ほど,生活行為向上マネジメントの効果が表れやすいという意味を示している.さらに初期の PACE-CR のオッズは 0.9 と有意な値を示しているが,これは PACE-CR の値が１指標低下する（活動性が低い）ごとに生活行為向上マネジメントの効果が出やすいことを示している.

（４）　生活行為向上マネジメントシートを用いた介入結果

① 目標とする活動の種類と内訳（表１参照）

作業聞き取りシートにて対象者１人があげた目標とする活動は１～３個あった.その活動を基本的ＡＤＬ,ＩＡＤＬ,趣味・社会参加に関する項目に分類すると基本的ＡＤＬ１８項目,ＩＡＤＬ２５項目,趣味・社会参加４５項目であった.

また,平成 20,21 年度の事業において対象者から聞き取った目標とする活動と比較し,新たに基本的ＡＤＬ８項目,ＩＡＤＬ９項目,趣味・社会参加２７項目があがった（表に網掛けで示すもの）.

表１：目標活動の種類と内訳

基本的 ADL（18 項目）	人数	M	F
早く信号を渡る	2	2	
外を歩く	1		1
歩行	6	3	3
階段昇降	3	2	1
坂道を歩く	1		1
椅子からの立ち上がり	1	1	
立ちしゃがみ動作	1		1
入浴	2		2
浴槽の出入り	2	1	1
洗体動作	1	1	
トイレへの移動	3	1	2
更衣	2		2
整容	1		1
爪切り	1	1	
自分のことができる	1		1
うまく話す	1	1	
普通の食事を食べる	1		1
物を押さえる	1		1

その他	人数	M	F
体力の向上	1		1
物忘れ防止	1		1
健康器具を使う	1	1	
孫とスムーズに話す	1	1	

IADL（25 項目）	人数	M	F
買い物	9	4	5
料理	15	1	14
洗濯	5		5
お鍋の準備、作製	1		1
食器の運搬	2		2
書字	2		2
2階の窓の開閉	1		1
ペットボトルの蓋あけ	1		1
友人宅を訪ねる	1		1
外食	1	1	
ラーメン屋に行く	2	2	
外出	1	1	
車の運転	1		1
公共交通機関の利用	3		3
一人で病院受診	3	2	1
裁縫	1		1
園芸	5	1	4
畑仕事	3	1	2
草取り	3		3
パソコン操作	2	2	
電話でちゃんと話す	1	1	
犬の散歩	1	1	
犬の餌やり	1	1	
手を使った仕事	1		1
理容室でひげを剃る	1	1	

趣味・社会参加（45 項目）	人数	M	F
散歩	7	5	2
ドライブ	1		1
旅行	5	2	3
温泉	3	1	2
ｳｲﾝﾄﾞｳｼｮｯﾋﾟﾝｸﾞ	1	1	
食事会	2	1	1
老人会への参加	2	1	1
同窓会への参加	1	1	
他者との交流	1		1
古民家見学	1	1	
個展を開く	1	1	
鉛筆画	1	1	
風景画	1	1	
墨絵	1		1
書道	2		2
茶道	1		1
読書	1	1	
刻字	1	1	
絵手紙	2		2
詩吟	2	1	1
カラオケ	1	1	
コーラス	1	1	
盆栽	1	1	
そばうち	1	1	

	人数	M	F
写真を撮る	2	2	
釣り	1	1	
山登り	2	1	1
野球	1	1	
水泳	1	1	
バトミントン	1	1	
ボーリング	1	1	
卓球	1		1
ゴルフ	1	1	
グランドゴルフ	1		1
編み物	3		3
和裁	2		2
洋裁	2		2
手工芸	2		2
刺し子	1		1
パッチワーク	1		1
ちりめん細工	1		1
きめこみ人形	1		1
ﾒﾀﾘｯｸﾔｰﾝ手芸	1		1
フラワーデザイン	1	1	
孫へのﾌﾟﾚｾﾞﾝﾄ作成	1		1

②　介入後の作業実行度と満足度の変化

対象者が目標としてあげた活動のうち,実際にプランを立てて介入を実施した活動は８９項目であった.対象者が３つの目標をあげていても,作業療法士はそのうちから１つの活動についてプランを立てアプローチを行っていた.アプローチを行った８９例について,約３ヶ月の介入の後,作業聞き取りシートにて行った実行度と満足度の変化を表２および図２に示す.

初回と比べ介入後に実行度,満足度ともに向上したケースは６９例（77.5%),実行度のみ向上し満足度は変化がなかったケース４例（4.5%）,満足度のみ向上し実行度は変化がなかったケース６例（6.7%）,両方とも変化なしが９例（10.1%）,実行度のみ低下し満足度は変化がなかったケースは１例（1.1%）,両方が低下したケースは０であった.

表２．介入後の実行度、満足度の変化

実行度・満足度ともに向上	69(77.5%)
実行度のみ向上（満足度変化なし）	4(4.5%)
満足度のみ向上（実行度変化なし）	6(6.7%)
実行度・満足度ともに変化なし	9(10.1%)
実行度のみ低下（満足度変化なし）	1(1.1%)

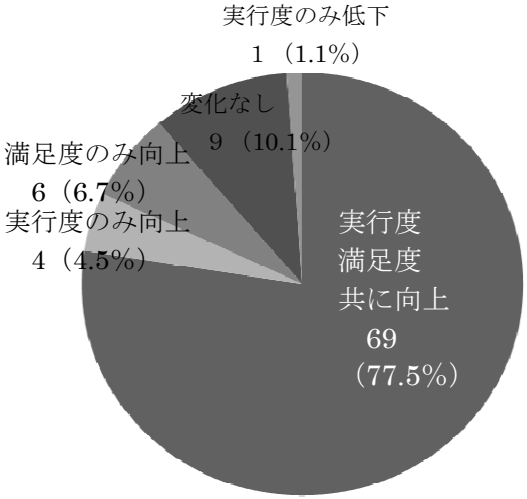


図２：実行度・満足度の介入前後変化

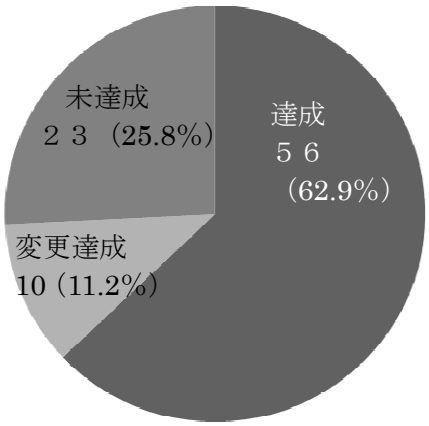


図３：介入後の目標の達成

作業遂行向上プラン表において,介入後目標を達成できたものは５６例（62.9%）,プランを変更して達成できたもの 10 例（11.2%）,達成できなかったもの 23 例（25.8%）であった（図３）.

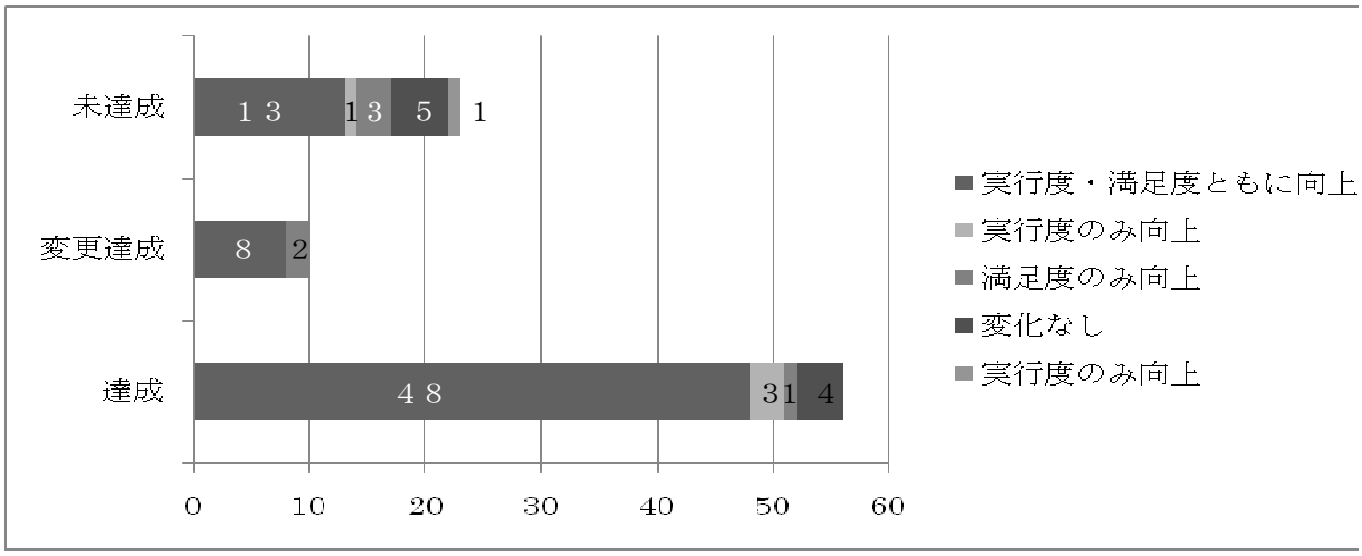


図４：達成度別の実行度・満足度の変化

目標を達成したものの実行度,満足度の変化については（図４）,両方が向上したものは 48 例,実行度のみが向上したもの３例,満足度のみが向上したものは１例,変化のなかったものは 4 例であった.目標を変更して達成したもののうち,実行度,満足度の両方が向上したものが８例,満足度のみが向上したものが２例であった.また,達成できなかったが,実行度,満足度が両方向上していたものは 13 例,実行度のみが向上していたものは１例,満足度のみが向上したもの３例,変化がなかったものが 5 例,実行度のみが低下していたものは１例であった.

③ 対象者アンケート結果（n=89）

約３か月の介入終了後,対象者に対してアンケートを実施した.その結果を図５に示す.

事業に参加して非常によかった,よかったとするものは７１例（79.7%）であり,あまりよくない,よくないとするものは４例（4.4%）であった.目標をいつも意識していたものは４０例(44.9%),時々意識していたもの３１例(34.8%)と約 8 割が意識しながら取り組むことができていた.事業に参加して元気が出たとするものは６７例（75.2%）,事業実施後の体の変化についてはすこし悪くなったと回答するものが１例あるが,事業への参加や今後の取り組みについては良好な回答を得ている.事業実施後の心,生活への変化については図のとおりであり,悪くなったとするものはいなかった.また,今後も取り組みたいとするものが７７例（86.5%）であった.

これからやってみたいこと（図６）については,引き続きこの通所リハに参加したいと希望するものが最も多く,家の生活において自分できることをしたいと希望するものが次いで多かった.

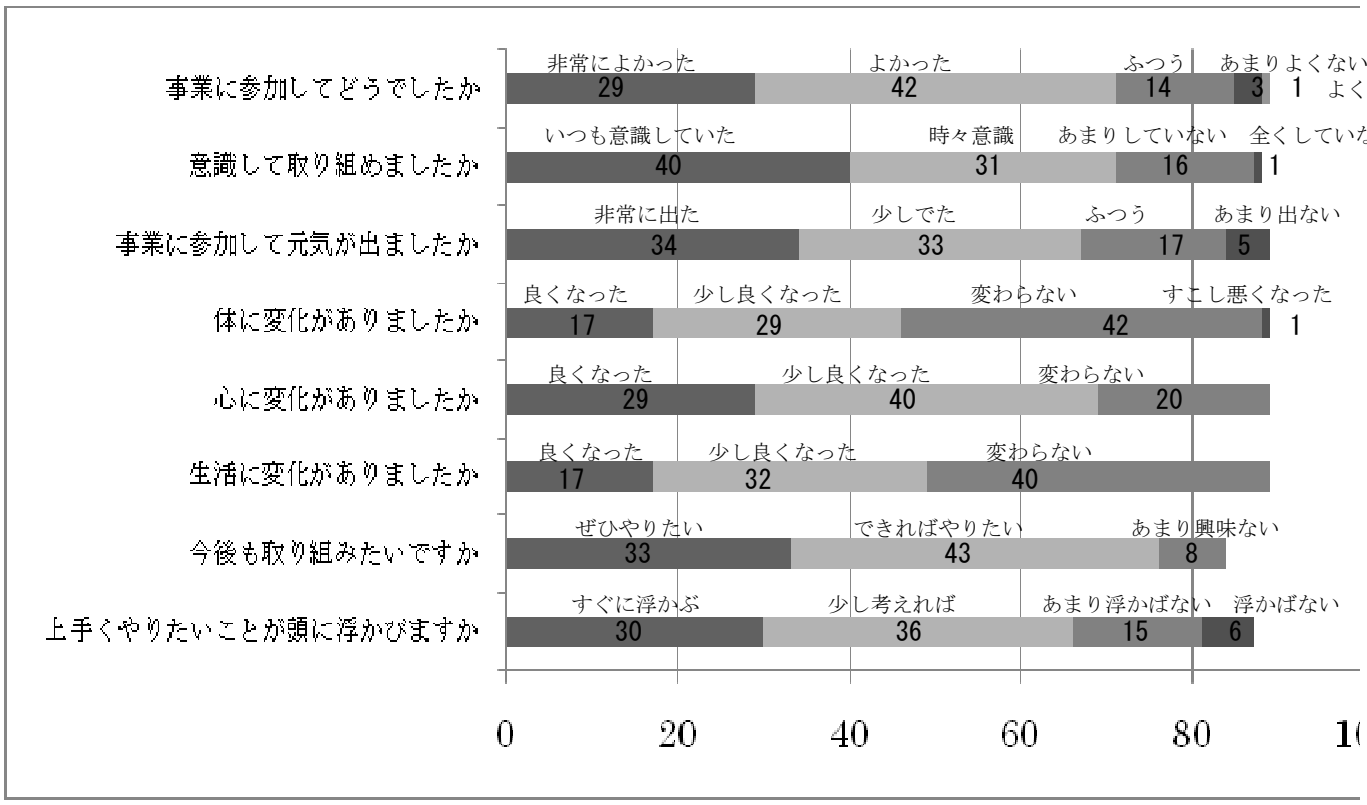


図５：対象者アンケート結果

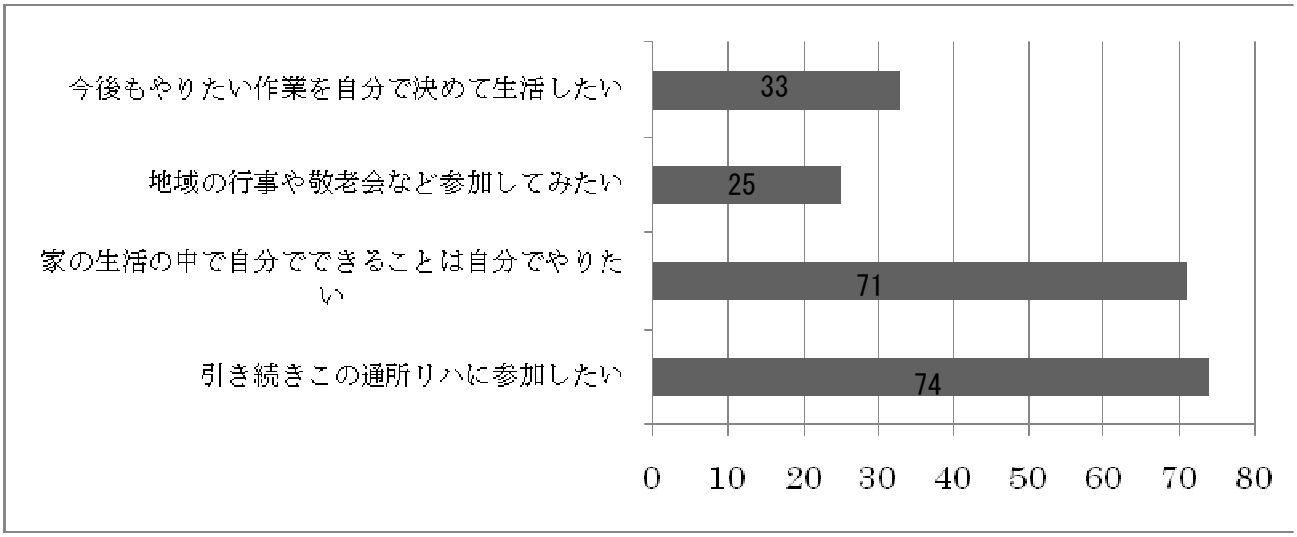


図６：これからやってみたいこと（対象者アンケートより）

④　家族に対するアンケート結果（n=54）

家族に対するアンケート結果を図７に示す.

本人が事業に参加して良かったとする家族は 46 名（85.2%）でよくなかったとするものはいなかった.事業に参加することで体や心,生活への変化にも良好な変化があったとするものが多かった.生活行為向上マネジメントを導入したことによる家族への介護負担については,負担はない,ほとんど負担はないとするものは 29 名（53.7%）,変わらない 24 名（44.4%）と９割以上が導入前と変わらないと回答している.

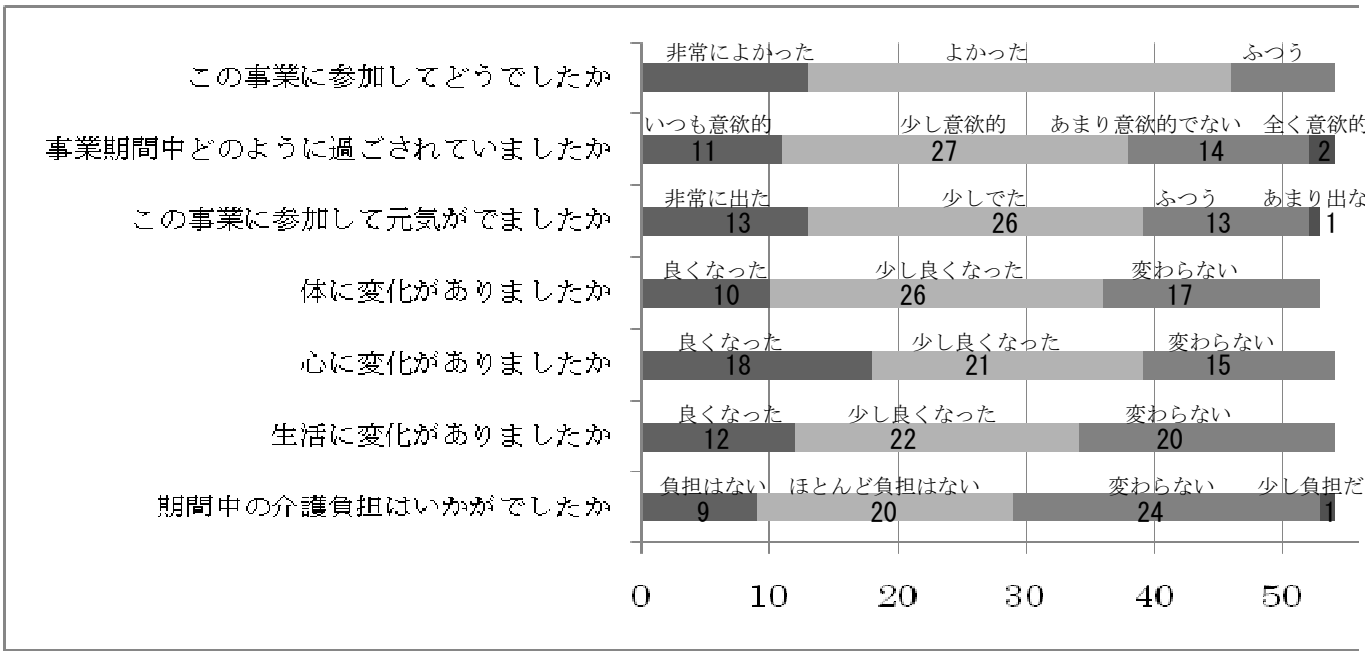


図７：家族へのアンケート結果

⑤ 実施施設アンケート結果（回答 15 施設）

本事業協力施設に対して事業終了後に本事業についてのアンケートを実施した. その結果を示す.

■生活行為向上マネジメントに取り組み効果と感じたこと

- 対象者から困っていることや現状について話してくれ、スタッフとのコミュニケーションが増えた。
- 対象者から「やってよかった」、「今後も続けていきたい」と積極的な意見が聞けた。
- 一度作業を行うきっかけを持ったことにより、表情が生き生きとして、能動的な生活に変化していくのが分かった。
- 対象者が趣味に対して意欲的になられた。
- 利用者から「ちゃんと続けています」「この位できるようになりました」と報告してくれるようになった。
- 対象者の外出の目的が変わった。
- 参加した対象者が元気になったと感じる。他スタッフからも対象者が元気になった、よくなったという声があがった。②
- 対象者自身が変化を感じ満足をされ、プログラムを継続しておられる。
- 介護認定が要介護２から要支援１になった人もいた。
- 対象者を同じ曜日に固め、活動に参加する際は一緒に参加してもらうことで、対象者同士の連帯感や活動中にリーダーシップを取って参加するようになった方もいた。
- 短期記憶障害が軽度の方は目標意識を継続でき、目的的に活動できた。家族に今回の活動の楽しさを話すことができた方もいた。
- 短期記憶障害が中等度から重度の方で具体的な目標が持てず継続できなかった方も、作業には意欲的に取り組むことができていた。
- 訪問リハを同時利用している対象者に対しては、生活行為向上マネジメントによるプログラムは実施しやすい。また、本人の受け入れもよかった。
- 訪問して家族とも話をしているからか、こちらから尋ねなくても生活の具体的な話をしてくれることが増えた。

・これまでは提案型の活動提供が多く、対象者にやらされている感が強く、スタッフもその場限りの提案となっていた。しっかりと計画を立て行うことで、対象者も目標が持て意欲的になり、スタッフも流れを共通認識でき活動遂行がスムーズであった。
・ﾃﾞｲｻｰﾋﾞｽでは個人に合わせたプログラムが難しい中、より利用者に沿ったプログラムが行え、実際に生活面で改善がみられた。家族からのﾃﾞｲｻｰﾋﾞｽへの信頼にもつながった。
・プログラム作成に至る過程の整理ができ、良かった。
・カンファレンスでもこれまでは心身機能や ADL が重視されていたが、この事業を通して興味のある活動を中心に考える話し合いが少しずつ行えるようになった。

■生活行為向上マネジメントに取り組み課題と感じたこと

・機能面の維持、向上を希望する対象者がほとんどのため、趣味、余暇時間に対してのプログラムのみでは満足度が低くなってしまう。そのため、機能面と趣味、余暇時間の介入時間を別に設ける必要があり、スタッフには負担。
・自宅で活動することに関して、手間がかかると消極的な家族もいた。
・本人が希望していても家族にどう思われるかを気にしている方もいた。
・認知症の方は作業活動をして元気になられる姿はよく見られている。しかし、目標意識を継続する、目的的に活動の遂行を持続することは難しい。達成感を味わうことはできるので、精神的な面や他者との交流面の評価も取り入れてもらえると OT らしい評価ができ実際の生活場面に反映できると思う。
・今まで実施していなかった活動を行ううえでスタッフへの説明や準備に時間を要した。
・職員側の体調不良でスタッフ数が不足し、人数確保が難しいこともあった。

■作業療法士として得た効果

・身体機能、ADL を中心にアプローチを実施しているため、余暇時間についてとらえる良い機会となった。③
・対象者が困っていることや課題、目標を考える良い機会となった。　深く情報収集できた。④
・本人の目標を引き出し、目標内容の作業分静し、細かく目標を設定して、実際に取り組む。この当たり前の流れが、いかに重要であり、また、難しい作業であることを改めて実感した。
・個別にゆっくりと関わり、話をよく聞くことで目標が明確になり、より利用者に沿ったサービスを提供できた。
・対象者をより細かくみていこうとする意識が強くなった。　②
・これまでは既存にあるできそうな活動を対象者に提供しながら興味に結び付けていたが、今回の実施では通所リハにない活動が興味にあがってきた。→実施が大変な場面もあった。
・一人一人のニーズに基づいた活動の重要性を再認識した。
・既にやっている活動の中でもやりにくいと感じている点があることが再発見できた。
・日ごろ、自分から「こうしたい」と言葉にしない人に焦点を当てた。要望が少ないと思われた人でも関わることで除々に潜在的な希望を聞き取ることができた。
・やりたいという気持ちがあっても、家族への遠慮などであきらめていることが沢山あることを知った。もう一度何かをやりたいという気持ちを引き出すためのきっかけ作りの大切さを感じた。
・対象者とともに細かなプランを立て遂行することで対象者に対する理解を深めることができた。
・家族と話をする機会につながった。
・従来のアプローチで短期目標が明確化できにくい対象者と共に評価し考え、作業を遂行していく中で気付きがあった。目標に向かって取り組む機会を持てた。
・時間はかかるが、対象者の生活や生き方に対する具体的な思いを引き出すことができ、サービスに活かせることを実感した。目標を立てるまでの作業は、利用者に主体性を引き出すための手続きであり、担当者が伴走者になるための手続きでもあると感じた。
・新人職員でも作業聞き取りシートなどを使用することで、生活の中の作業に目標を設定することができ、作業を用いたプログラムを実践することができていた。生活の状況や本人の考えなどの情報収集も以前よりも意識的にできるようになった。

・環境が人の能力を変えることが分かり、環境の大切さを改めて感じた。
・対象者が考える目標と OT が考える目標が一致することは難しいと感じた。一緒に目標を考え、対象者が満足できるようなゴール設定を提案できるかが課題。
・ケアマネや家族との情報交換が不足していたため、十分理解が得られなかった。
・ケアマネの考えや意見もあり、実際どこまで踏み込んでよいのか分からなかった。
・ケアマネにこの取り組みを説明したところ高い関心を示してくれた。「では、訪問介護ではこのような関わりをしていきましょう」などのプラスの展開が見られた。
・事業に共感したケアマネが、このような取り組みに合うような新規利用者を紹介してくれた。
・居宅介護サービス全体のケアプランとの整合性や連動性が問われる。
・家族や関連スタッフとの連携がないと難しく、協力、連携の必要性を感じた。
・利用者と家族の思いにギャップがある場合、家族を交えた話し合い、目標設定が必要な場合もある。
・認知症の方が対象なので OT 間でも取組みに温度差があった。
・利用回数が少ない方には評価、介入が難しかった。
・異なる時間や場所で介入することが難しかった。
・生活の中でのプラン、目標に介入しにくかった。
・機能面やリスク管理が中心となり、精一杯な感じ。
・訪問する必要がある場合、目的をもって訪問するので、家族も応対、協力がしやすいように感じた。
・施設としても地域とつながっている実感が持てた。
・今回対象でなかった利用者が「私もやってみようか」と関心を持たれた。波及効果のある作業環境を作ることができる。

■　他スタッフが得た効果

・他職種から目標を定めたアプローチの重要性を改めて感じたという声が聞かれた。
・対象者のニーズを聞くことで新たな印象を持ち、相互で意見交換できた。
・その人を知ろうと個人に着目してくれた。
・利用者へ意識してかかわるようになった。
・目的とそれに向けての関わりが明確であると好評。
・利用者の能力（できること）を見つけることができ、スタッフが喜びを感じた。
・本人の希望に沿った作業の提供により対象者が喜んでくれる関わりであるということ自体がスタッフの仕事の意欲につながる。やっていて楽しい、本人が希望したことだから自信をもって後押しできるなどの感想が聞かれた。
・利用者に対する作業の選択幅や介入の可能性が広がった。
・対象者に介入したい気持ちがあるが方法が分からなかったため、興味を持って取り組んでくれた。
・機能面へのアプローチと創作活動など縦割りに考えていたものが、興味のある活動を行うためのステップとしてとらえられるようになった。

■生活行為向上マネジメントの内容と記録について

・活用により多方面の分析をすることができた。
・今までよりも利用者に沿ったプランを立てることができる。
・本人のニーズに応じた目標設定であること、ICF,PDS サイクルによるフレームワークを取り入れ、目標達成のために現実的実用的に徹しているところが良いと感じる。たとえ目標達成できなくても、この手続きそのものが本人にとって有用であり、繰り返すことで作業レディネスが高まると思う。
・利用者の目標を具体的に設定し、本人、デイケア、デイスタッフ、ケアマネなどの協力者に伝え、共有することでまとまりがみられた。
・COPM の第１、第２段階のような形式にしたほうがより対象者のニーズが明確になりプランが立てやすいのではないか。
・項目が多く、対象者や職員にとって負担となる。もう少し平易な書式、方法のほうが良い。

・聞き取り、プランの経過を見ていくと、経験の浅い人と熟練者など個人の能力により差が出やすいものであるように感じた。②
・若いOTとってアプローチの手法を導くためのツールとして良い。
・他職種に分かりやすい記録表現にすることが必要。
・他職種にも使える記録にすることが必要。
・時間がかかることがデメリット。
・他職種が理解するためには研修が必要。
・主体性が引き出せない、コミュニケーションが困難な方の場合、ニーズの抽出に時間がかかるケースも多いと感じる。

＊作業遂行聞き取りシート

良い点
・対象者の生活の中にある課題を発見し、目標設定するツールとして使いやすい。
・多くの角度から尋ねることができる。
・目標に対する本人の実行度、満足度の情報が得られることでよりニードに応じたプログラムの選定が可能になった。
・自己評価について、他者からみた感じと本人との違いが分かり、そこから目標設定を考えるヒントを得られると感じた。
・チェックリストとの併用で、利用者への説明や目標設定も円滑で分かりやすく行えた。

改善・検討・記入時の注意点
・時間がかかる。
・対象者には説明文の理解が難しい。　②
・実行度、満足度で悩む人が多く、聞き出しに工夫が必要。
・実行度と満足度の違いが対象者に伝わりにくく同じ点数になった。
・主観的な表現を数値で表すので、視覚的にわかるメジャーがあればわかりやすい。
・実際にやりたいと言われた内容（水泳や野球など）が通所リハでは実現困難で困った。
・認知症の方が対象の施設では、具体的な目標をあげるうえで全員興味関心チェックリストが必要であった。
・対象者からあがった目標を日常でどう活かすのかを引き出すことに苦労した。
・OTが対象者にできそうな課題に誘導してしまっていた。
・結果をどう分析してﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸするか。

＊興味関心チェックリスト

良い点
・アプローチ内容が単調になり、目標があいまいになっている対象者のニーズの掘り起こしに活用できた。②
・本人の思いをよく聞くことができた。②
・対象者のニーズだけでなく、欲求を聞きだすことができるもである。
・各作業ごとに考えを伝えてくれる方もいるので、直接プログラムにつながらなくても、情報収集の手段として利用でき、対象者の全体像を把握しやすい。
・他職種にもとってもらうことができる。
・本人に任せて記入でき、思ったよりも時間がかからなかった。

改善・検討・記入時の注意点
・ほぼ全てに記入する人もおり、本当にしたい作業なのかを判断することが必要。②
・作業項目もあいまいなものがあり、対象者が理解しにくかった。
・項目が多い。
・興味のある活動を抽出した後、生活に沿って話を広げていく技術が必要。
・高齢者（特に後期高齢者）にとっては、もっと身近な関心例があるとよい。

＊作業遂行アセスメント表

良い点

・目標達成までの方向性は ICF に沿っているため理解しやすい。心身機能、活動、環境の整理ができきる。問題点が整理しやすい。
・全体像が把握しやすかった。
・日常生活を観察するのにとても参考になった。
・本人に説明して一緒に実施していくという手順は具体的な目標やその手順を共有することができて良かった。
・この表を通して本人から別の機関の訪問リハ担当者に意図が伝わり、自宅での家事活動につながったケースもあった。
・要因」「強み」「予後」を順序立てて考えられるので、具体的な目標を設定できる。

改善・検討・記入時の注意点

・記入の理解に時間がかかる。書き方についてもっと多くのマニュアルが良いとよい。特に経験年数の若い OT や他職種には理解が難しい。
・もっと簡単な内容で簡便に示せるものが良い。
・達成可能なニーズに関連する情報のみを書き込みながらアセスメントしていくか、思いつくまま書き込んでいって関連性を図式化しながら（枠組み、線で結ぶ）アセスメントしていく方法で使用していきたいと思う。本人にも確認するのなら、経緯が視覚的に理解できるものが良いのではないか。
・ICF 自体の理解が不十分な点があったため記述に時間を要した。
・家での状態を知らないと記述できないため、他職種からの情報収集や訪問が必要であった。
・使用しているリハビリ実施計画書と重なる部分が多く、業務効率が悪い。実施計画書の一部として利用できれば良いと思った。

＊作業遂行向上プラン表

良い点

・プログラムの手順が整理できる。
・作業工程で分析することで、作業の手順や本人、家族、スタッフの役割が分かりやすくなった。③
・どの段階で問題、修正が必要なのかを考えることができた。
・アセスメント表がしっかりできれば時間をかけずにスムーズに記入できる。

改善・検討・記入時の注意点

・企画・準備力、実行力が分かりにくかった。③
・特に企画・準備力が分かりにくい。企画力の定義（いつ、どこで、誰と何をどのようにすれば作業を実施できるかを本人が主体的に考え、検討できる能力）をしっかり理解する必要性がある。
・作業工程に分類するほど細かくプランする必要のない人もいるため、目標の動機付けを段階的に計画を立てて行うようなアセスメントやプラン表があってもよい。
・プログラムの４段階の評価があいまい。
・一部介助の人も一番下位の４．手助けが必要に当てはまるのはどうかと思う。②
・すべて「一人で可能」に向かわせようとする説明では多様な達成のアプローチを妨げるのではないかと思う。
・作成に時間がかかる。②
・経過記録にある基礎練習から社会適応練習までのプログラムをプラン表に載せるとすっきりすると思う。
・基礎練習から社会適応練習までの分析項目が身体障害の視点が主であり、意味合いは理解できるがややなじみにくかった。
・Plan、Do、See の分類が理解しにくかった。

■生活行為向上マネジメントの評価所要時間について（１ケースに対して）

本人からの聞き取りに要した時間　20 分～60 分
思考、記入に要した時間　平均 60 分　20 分～150 分、170 分, 240 分

■効果指標の評価について

・評価の量としては適切。
・とっていて PASE-R、主観的健康感、老研式活動能力指標は変化がとても分かった。
・思ったよりも社会参加されていることが分かった。
・HUI はﾃﾞｲｻｰﾋﾞｽでは OT だけで評価するのは難しかった。
・項目が多い。対象者からも大変といった意見が聞かれた。②
・PASE－R は似通った質問項目が多く、また１週間の時間になるとあいまいで、覚えていない人が多い。
・PASE-CR は、要支援者にとって初回評価と最終評価で一番変化のあった評価であった。
短期記憶障害の人はとれる。家族などの評価も必要と思われる。通所リハで本人からの回答による評価では正確な評価にならない場合がある。
・今回とった評価すべてをとる時間がない。

■事業実施後の施設における活動の変化

＊施設全体
・利用者の増員で外出などの活動が少なくなっており、スタッフも必要性を感じていた。今回の事業が取り組むきっかけとなり少人数での外出方法を複数提案することで、スタッフがパターンを把握し、毎月の外出を企画、実現できるようになった。
・通所だけでなく、入所に対しても博物館の学芸員に来てもらう出張サービス（古い道具を利用した回想法）を利用したグループ活動を企画している。
・新たに上がった活動を施設内でも取り入れて実施している。
・施設の駐車場を活用して歩行練習などを行うようになった。
＊対象者個々
・個別に抽出できた希望の活動は継続して実施している。③
・家の周りの草むしりや雪かきなどできる範囲で行っている。
・自分の衣類洗濯が可能になった後、暮しの息子の衣類も洗濯するようになった。
・今までは運動のためにスーパーへ行っていた方が、買い物を目的に行かれるようになった。
・外出機会が増え、家族と電気屋や日用品の買い物によく出かけるようになった。
・以前は何事にも意欲が見られなかった方が、自信をもたれたのか他の活動にも参加されるようになった。
・具体的な活動はないが、対象者に対して環境設定やできる活動を提案、提供できたことで対象者が自ら活動を継続して実施している。

■通所リハにおいて生活行為向上マネジメントを実施していくための課題・意見

・介入できる時間の問題　⑤
：各利用者にどれだけの時間が割けるか。特に外出に関するアプローチには時間が必要だが、現状は困難。通所リハ２０分で行うことが難しい。評価だけの介入では満足度が下がる。全員に実施できる時間がない。
1 日平均 25 名を対象にしているので、評価スケジュールなど、工夫が必要である。
個別の目標に対するプログラムの実施は対象者の満足度が高いことから、今回の研究対象者に限らず、すべての利用者への必要性を強く感じた。しかしその反面、現在の通所介護サービス提供のスタイルで、それを実現していくには、その答えはすぐには見つからない。
・通所事業で行うには手厚い人員配置が必要。OT の配置から考えても現法律では不採算。他職種協同で行う工夫や適応基準をつくって対象者を選定して実施するなどの改良が必要。

・アセスメントのために訪問が必要なケースもいる。業務内でどのように可能にしていくか法的整備が必要。
・自宅または自宅周囲に行かないと無理な内容が目標として多く挙げられたため、実施にあたっては施設内システムも含めた検討が必要になってくる。②
・事業所実施プログラムの中に組込んでしまうのがいいと思うが、個別対応が多くなると思うので、そのような人員配置が必要になる。（当事業所の場合、定員 15 名でスタッフが 6 名いるので可能だった）
・自宅訪問が難しい点で、書面や電話での対応が主となり、説明に配慮を要した。
・全老健がＲ４システムを提案・広報しているため、併用、連携できるとより現実的なものなるのではないか。
・訪問リハと併設のため担当制をとっていない。訪問リハも週２日兼務となるとどのように実施するか。
・記録のためのデスクワークが増える。②
・自宅を訪問することで、本人もこちら側の本気が伝わるのか、それにこたえようとするのか、やる気が増したように思う。しかし、訪問は１ケース１回が限界だった。
・本人のニーズと家族ニーズとのすり合わせをしないとマイナスの結果となりうることもある。家族の同意の得方。
・結果のフィードバック方法。評価の意味するところを理解することが必要。
・ニーズが聞き出せない人のほうが多いため、マネジメントの柔軟性が求められる。
・意味ある作業の「意味」の中身について、記載（あるいはチェック）するしくみがあると良い。たとえば、「家族に迷惑をかけたくないから」「家族に喜んでもらいたいから」「楽しみたいから」「できるだけ健康でいたいから」などチェックするのはどうか。
・意味ある作業には、達成されればもうその作業を行うことがない 1 回完結型、毎日あるいは 1 週間に 1 回等、習慣的に行う必要のある日常生活習慣型、機会があれば必要になってくる不定期型、趣味活動など本人の意思に応じて行う自発型などがあると思われるが、そのような違いを事例を示して表したものがあると理解しやすい。また、そのような型それぞれに合ったアセスメントやプラン立案があれば、実際使いやすいかもしれない。
・居宅サービス全体のケアプラン、事業所ケアプランとの整合性、連動性をどう図るかが課題。
・対象者、家族、ケアマネには支持される手法である。他医療職にＯＴらしさが示されて良い。らしさだけではなく、専門性がもっと高まるような研究や実践が今後の課題と感じる。
・このマネジメント手法をこのまま使うのではなく、現場、現場で実際業務に継続可能な応用版を模索してもらい、それを集約・改良していくと良いと思う。それには普及が必要。
・個別での関わり（目標の聞き取りや評価を含めた）は、利用者の満足度と意欲を向上させる大きな要因であった。しかしそれが充分に行えていない現状にジレンマを感じる。

３）　新たな通所事業所における介入検証結果のまとめ

（１）　主観的健康感,Barthel index,PASE－CR,HUI において初期評価から最終評価までに有意な変化（改善）がみられた.また,HUI の下位項目では,「感情」と「痛み」に改善がありこの結果は昨年度にもみられた.「感情」や「痛み」などの要因に対しては,今回の取り組みでは,直接的には介入していないが,これらの要因に向上が見られたことは,生活行為向上マネジメントによる介入が対象者の満足度を向上させることを示唆しているといえる.

また,生活行為向上マネジメントを活用し,対象者の希望を聞くということ自体が満足度を向上させるのかもしれない.

いずれにせよ,今回の結果より,生活行為向上マネジメントを用いた介入は平成 21 年度結果と同様,健康関連 QOL の改善に効果があり,活動性や ADL の改善にも効果があることが示されたといえる.

（２）　今回,主観的健康感の数値が高い（健康感が悪い）ほど,生活行為向上マネジメントの効果が表れやすいということが分かった.さらに PASE－CR の値が 1 指標低下する（活動性が低い）ごとに生活行為向上マネジメントの効果が出やすいことが示された.これらの結果は生活行為向上マネジメン

トの実施対象者を選定する際の指標となると考える.

（３）　対象者がしたいと思った作業を実際のプログラムとして実施した場合,対象者の実行度,満足度の改善がみられた.また,約３か月の介入後,目標に達成しなくても実行度,満足度が向上することが分かった.

（１）にも述べたが,生活行為向上マネジメントにより本人の意に沿って希望を聞くということで満足度や意欲が向上すると考えられる.今回の結果から,対象者の希望に沿うことの重要性を改めて示すことができた.

さらには本人および家族,施設アンケート結果からも生活行為向上マネジメントによるアプローチは対象者に好印象を与えることが分かった.

これらのことから本人の望む作業に焦点を当てたアプローチが有効であることが明らかとなった.

（４）　実施施設においては,対象者が主体的に活動し,元気になるといった変化を認識することができた.また,機能面重視ではなく,本人の望む作業を聞き,本人の意向に沿いながらアプローチを実施していくことの必要性を再認識できる機会になった.

また,生活行為向上マネジメントを円滑に行ううえで家での状況把握や他職種との連携,家族への情報提供の重要性や実施方法の工夫の必要性について感じる機会にもつながった.在宅支援を行う通所事業所において,これらの事項は重要であり,生活行為向上マネジメントの実践はその点に気づく機会をも提供できると考える.

（５）　他職種からは,目標をもって対象者へ関わることの重要性や本人の希望に沿った作業の提供により対象者が喜んでくれることがスタッフの仕事の意欲につながる, やっていて楽しい, 本人が希望したことだから自信をもって後押しできるなどの感想が聞かれた. また, 対象者への作業の選択幅や介入の可能性が広がったといった結果が得られた.

生活行為向上マネジメントを活用した介入は作業療法士のみでなく,他職種にとっても対象者への関わりを考えるうえで良好な結果を得られることが分かった.

（６）　生活行為向上マネジメントの実施により,対象者が家の周辺の草むしりや雪かきを行う,家族の衣類の洗濯を行う,買い物に出かけるなどの IADL への広がりを得ることができた.また,対象者に応じた作業の実践が施設全体の作業活動として加わる,毎月の外出が実現するなどの新たな作業活動の立案,定着させる機会となった.

３か月といった短期間の取り組みにおいても,生活行為向上マネジメントを活用して対象者の望む作業に着目した介入を実施することで,対象者や施設全体の作業の広がりの実現が可能となると言える.

４）今後の課題

１）　施設に対するアンケート結果から,生活行為向上マネジメントツールを活用していくための次の課題が明らかとなった.

①作業聞き取りシートの説明文の検討
②興味関心チェックリストの項目の検討（年齢層などに応じた改良）
③作業遂行アセスメント表の記述マニュアルの作成
④作業向上プラン表の工程の解説,能力評価の検討,記述したプログラムと「基本練習」「基礎練習」,「応用練習」「社会適応練習」といった項目立てとのつながりについての検討及び記入方法の工夫,また,これらに加えて他職種にも記述しやすいツールとしての検討や,言葉の解説などが必要であることが分かった.

この結果を受けて,作業聞き取りシートおよび作業向上プラン表の改編を行った（資料１参照）.
その他の項目については,今回の結果をさらに発展させていく機会をもち,検討していきたい.

２）　通所事業所において生活行為向上マネジメントを実践していくためには,作業療法士が直接的に介入できる時間と内容の検討,記録の効率化,施設内システムの見直し,居宅生活指導の実施などの課題があることが分かった.

①　作業療法士が直接的に介入できる時間について

通所リハビリテーションにおける作業療法士の介入はリハビリテーション＝機能訓練といったイメージが強く,対象者は作業療法士に体に触れてもらうなどの身体機能に対するアプローチを期待している現状がある.また,現在の通所リハビリテーションにおける作業療法士の介入時間も個別加算の基準が 20 分となっていることから,その時間内での実施に縛られているところが大きい.そのため,機能面へのアプローチではない,面談のみの対応や時間を要する調理,外出などの IADL アプローチを実施するうえでの妨げとなっている.効果的な生活行為向上マネジメントの実施には,本人の希望を聞き取るための面談時間や IADL 実施のための時間を 1 回の通所利用時間内にとることが必要であり,1 単位 20 分として, 1 つの作業を一連で行うために必要な最大 60 分まで,すなわち 3 単位までの利用を 1 回に可能にするなどの柔軟な算定ができる仕組みづくりが望まれる.

②　面談や記録にかかる時間の課題

時間については,面談の時間,プログラム作成のための時間が通常業務に加わることの負担があるといった感想があった.特に記録については,多くの場合 1 ケースにつき約 60 分を要しており,長い場合には 1 ケースに 4 時間をかけたという作業療法士もいた.

一方で,目標を立てるまでの時間（面談,記録のための検討）は利用者の主体性を引き出すための手続きであり,担当の作業療法士が対象者の伴走者となるための手続きであると感じたという意見もあった.

対象者へのスムーズな面談や検討手法についての研修を実施するとともに,面談により対象者の希望に寄り添うことの意味や検討に時間を費やすことで対象者への理解を深める機会につながるという意識の啓発も今回の実施から得た意見を参考に普及していく必要性を感じた.さらに時間を要し,勤務時間外での実施となるこれらの記録に対する報酬があることで,より積極的な取り組みへとつながると考える.

③　居宅における生活指導の実施

作業療法士が介入できる時間の限界については,①でも述べたが,介入できる場所にも限界があり,効果的な介入が実施できていないことが昨年度の調査に引き続き,今回の調査結果からもわかった.効果的な生活行為向上マネジメントの実施には,通所事業所において,可能となった作業を実際の生活場面で実施,確認するための居宅での生活指導が必要である.通所事業所では,本人が望む作業に必要な行為を模擬的な環境で実施できる支援が行える.居宅生活指導（仮称）では,模擬的環境でできるようになった作業を実環境である対象者の自宅やスーパー,郵便局やバス乗り場などへ出向き,作業療法士が本人とともに作業を実施しながら行うことが必要である.今回の調査においても自宅または周辺環境へ出向かないと実施困難な目標が挙げられ,実施に手間取ったといった意見や,自宅に訪問したケースでは訪問によりやる気が増した,実用的な実施につながったといった意見が聞かれた.また,環境面での情報収集は自宅などに訪問して行うことが必要であるといった課題が挙げられた.

今回の結果から,対象者への効果的な介入を実施するうえでは,訪問による情報収集や実環境での実施機会を持つことが必要であることが分かった.通所事業所の作業療法士により居宅訪問指導が行えるシステムの構築が必要であると考える.

資料１

作業聞き取りシート（改定）

相談者		年 齢	歳	性別	男　女

認知症や寝たきりを予防するためには,家事や社会活動などの作業を維持し,参加していることが重要です.

１　そこで,あなたが困っている,または,問題を感じている事柄（する必要があるのにできていないこと,なんとかやっているがあまりうまくできていないことなど）で,やってみたい,もっとうまくできるようになりたいと思う事柄がありましたら,３つほど教えてください.

２　次に,それぞれについて１～１０点の範囲で思う点数をお答えください.
①実行度・・左の目標に対して,どの程度実行できている（頻度）と思うか.
十分実行できている場合は実行度１０点,まったくできない場合は実行度１点です.
②満足度・・左の目標に対して,どのくらい満足にできている（内容・充実感）と思うか.
とても満足している場合は満足度１０点,まったく不満である場合は満足度１点です.

		自己評価	初回	最終
作業の目標	□A（具体的に作業の目標が言える） 目標	実行度	/10	/10
		満足度	/10	/10
		達成の可能性	□有 □無	
	□A（具体的に作業の目標が言える） 目標２	実行度	/10	/10
		満足度	/10	/10
		達成の可能性	□有 □無	
	□A（具体的に作業の目標が言える） 目標３	実行度	/10	/10
		満足度	/10	/10
		達成の可能性	□有 □無	
	□Ｂ（具体的にイメージができない）	**→興味・関心 チェックリストへ**		

作業遂行向上プラン表（改定）相談者：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　記入日：　　年　　月　　日

達成可能なニーズ	作業工程分析		評価		達成のためのプログラム				いつ，どこで，誰が支援して行うか（通所，家，外など）（本人，家族，ｽﾀｯﾌ）	達成
			前	後	基礎練習	基本練習	応用練習	社会適応練習		
	企画準備力 PLAN		1 2 3 4 5	1 2 3 4 5						□達成 □変更達成 □未達成 □中止
	実行力 DO		1 2 3 4 5	1 2 3 4 5						
	検証完了力 ＳＥＥ		1 2 3 4 5	1 2 3 4 5						

1.一人で可能　2. 手掛かりや見本があれば可能　3.練習により可能　4.一部手助けが必要　5.ほとんど手助けが必要

資料２：協力施設紹介

１．東京北社会保険介護老人保健施設　さくらの杜

１施設の地域概況

（地域特性, 人口, 高齢化率など）

当施設がある東京都北区は, 荒川, 隅田川, 石神井川, 新河岸川の４つの河川に恵まれ, それぞれが豊かな水辺空間を形成している. その他, 徳川八代将軍吉宗が江戸庶民の行楽のためにさくらを植え開放した飛鳥山公園や公園のそばを走る都電は都内唯一の路面電車として懐かしい下町の安らぎを感じさせてくれる.

このような豊かな自然がある一方で, ＪＲの駅数が都内２３区中で最も多く, 区内のほとんどの住宅地が駅からの徒歩圏内にあるのも特徴で, 施設の最寄り駅である赤羽駅から池袋駅まで９分, 新宿駅までは１４分, 東京駅まで１５分と都心へのアクセスがとても便利な街である.

北区の人口は, 平成２２年１２月１日現在で３１８，２３０人, 年齢別では１４歳以下が３１，１９６人（９．８％）, １５歳から６４歳までが２０８，５５６人（６５．５％）, ６５歳以上が７８，４７８人（２４．７％）と４人に一人は６５歳以上の高齢者で, 現在都内で最も高齢化率が高くなった.

２施設の概要

・設置母体（あれば）公益社団法人　地域医療振興協会

・組織概要　関連機関と定員

公益社団法人地域医療振興協会では, 全国的に地域医療への実績をもつ医師を会員としてへき地医療を中心として, 地域医療の確保と質の向上を図り, 地域医療への貢献を目的としている. 現在, 全国４９施設の病院, 診療所, 老人保健施設, 福祉施設を運営している.

さくらの杜では, 今年度, 隣接する２８０床の急性期病院東京北社会保険病院とより連携を深めることで, 本来老健施設の機能である在宅復帰を目指した中間施設としての役割を果たすことと, 在宅生活を支えるためにショートステイの利用者の受け入れを積極的に行っている. その中で, 通所リハビリテーションでは通所の利用者で且つショートステイの希望がある者を積極的に受け入れ, リハビリテーション・サービスは通所で行われるものと同等レベルのものを提供している.

＜さくらの杜＞

所在地　：東京都北区赤羽台４－１７－５６

開　　設：平成１６年（２００４年）

定　　員：入所　１００名（ショートステイ含む）５名

・職員（職種と人数）

医師／２名（兼務）, 看護師／２名, 介護職員／８名, 支援相談員／１名, 管理栄養士（兼務）１名, 運転職員／１名, 理学療法士／１名, 作業療法士／１名

・通所事業所の概要（定員, 一日利用数, 登録者数, 営業日など）

開設：平成１６年５月

営業日：月～土曜日（祝日含む）, ６～８時間

３利用者の状況及び今回の研究事業対象者

＜利用者の状況＞

定員：３５名／日（登録利用者数は１４０～１５０名前後）

稼働率：通所　９４．６％

平均年齢：７８．５歳

平均介護度：２．３

＜今回の研究事業対象者＞

・介護度別登録者数

要支援２／１名, 要介護度１／２名, 要介護度２／２名, 要介護３／１名, 要介護５／１名

・疾患別利用者数

脳血管疾患　３名, パーキンソン病　２名, 頸髄症１名,

・今回の研究事業対象者の選定方法

対象者は ７ 名. 精神機能面やＡＤＬレベルは高いが, 外出等屋外活動がなかなかできない方, 体調不良や病気の発症により入院し, その後意欲低下がみられる方を中心に選定した.

４研究事業実施にあたって調整,配慮及び苦労,特別に取り組んだ点
①　筆者が入所担当であったため,全ての土曜日を通所勤務に変更し,また土曜日以外に外出訓練を計画した際は通所勤務に変更した. ②　個別にアセスメントを行い,新しいプログラムを追加している様子を見て,研究の対象者だけが特別扱いされていると利用者やスタッフから思われ,クレームにつながらないよう「通所だより」に研究の内容を書き理解を促した.また,この研究をきっかけになかなかできなかった外出等の活動の充実を図るため,研究中に,すべての利用者を対象に外出等の活動を企画し実行するということをスタッフに伝え,研究中には手ごたえも感じられたため,研究終了直後より計画を立て平成２３年１月より実践中である.

２．ハートケア市川

１施設の地域概況
・地域特性：市川市は千葉県の西部,江戸川を隔てて東京都と相対しており,都心から 20 キロメートルの圏内で,都心部と県内各地域を結ぶ広域交通網の集中する位置にある.地形は北から南に向かってやや傾斜しており,北部の台地はおおむね標高約 20 メートル,それ以外はほぼ平坦地.北部には梨栽培などの農業が盛んで屋敷林などの緑や学園が多い文教･住宅都市.南部は,東京湾に臨み京葉工業地帯の一翼を担っているとともに,新しい都会的な住宅都市が形成されている. ・人口：約 47 万５千人で,県内で４番目.千葉県の人口の 7.7%を占める. ・高齢化率：現在の高齢化率は 16.4%.平成 26 年度には 19.4%,5 人に 1 人が高齢者と予測されている.
２施設の概要
・設置母体：医療法人社団哺育会（上尾中央医科グループ） ・組織概要：介護老人保健施設　入所 120（うち 40 が認知棟）・ショートスティも実施 ・職員（常勤のみ記載）：医師１・看護師５・介護士 48・ＰＴ２・作業療法士７・ＳＴ２・管理栄養士２ ケママネジャ３・支援相談員２・居宅介護支援２・事務７・クラーク１ ・通所事業所の概要：定員 40 名　一日利用数,登録者数１０４名, 営業日は月～土曜日（祝祭日含む）.日曜・年末年始はお休み 6 時間以上 8 時間未満のご利用.週１日～４日の利用（平均週２～３日） 提供サービスとして リハビリ：個別訓練（要介護の方）／チューブ・パワーリハビリ（予防の方含む）／言語訓練 通所フロア：入浴／足湯／レクリエーション／学習療法／アクティビティや麻雀 曜日によりボランティアによるサークル活動（生け花・編み物・習字など）も実施している.
３利用者の状況及び今回の研究事業対象者
・　介護度別登録者数：　支援１：７名　支援２：１３名　介護１：２６名　介護２：４０名 介護３：１８名　介護４：１１名　介護５：９名 ・今回の研究事業対象者の選定方法 ①　協力の説明をご本人にすることができて,かつご自分で同意の署名が可能な方 ②　現在のプログラムが煮詰まっている方,日常生活にうまく反映されていない方 ③　週 2 回以上で,定期的に通所リハビリをご利用（出席）されている方
４研究事業実施にあたって調整,配慮及び苦労,特別に取り組んだ点
当施設は通所のリハビリに関して担当制をとっておらず,また担当者は訪問リハビリも週２日兼任で実施しているため,この事業の対象者の決定や実施手段をどのようにするか苦労した.結局,担当者が通所リハビリに関わることができる曜日の対象者や訪問リハビリも兼任で実施している対象者を選別し,できるだけ対象者のリハビリを担当しつつ,通所フロアでの自主トレ,他スタッフへのプログラムの伝達などの方法,昼食後の昼休みの活用（評価など）なども駆使することで実施することができた.

３．加古川白寿苑

１施設の地域概況

加古川白寿苑のある加古川市は,兵庫県の南部に位置しており,市内を一級河川加古川が貫流している.
総面積 138.51･,総人口約 270,000 人都市である.高齢化率約 17%と年々増加している.
気候は温暖で,比較的雨が少ない.重化学工業地帯や大型量販店の激戦区となっている南部と農村風景残るのどかな雰囲気の北部とで全く違う景観が楽しめる二面性のある都市である.
聖徳太子ゆかりの「鶴林寺」や,宮本武蔵の子伊織が再建奉納した「泊神社」も名所となっており,毎年 11 月には市内を練り歩き,散歩することの楽しさの発見,人的交流や健康促進を意図した企画「ツーデーマーチ」が開催され,最大 40km の道程を踏破するために全国から多数の参加者がやってくる.

２施設の概要

･設置母体:特定医療法人社団順心会
･組織概要:施設長の下,通所･一般棟･認知症専門棟･リハビリ･栄養から構成される「看護介護部」と管理･支援相談から構成される「事務部」の 2 本柱からなる.
･関連機関:病院,介護老人保健施設,グループホーム,訪問看護ステーション,居宅介護支援センター,地域包括支援センター,地域リハビリセンター,リハビリテーション専門学校
･老健施設の定員:100 名(一般 30 名,ユニットケア 30 名,認知症専門棟 40 名)
･老健職員数:医師 1 名,看護 19 名(パート含),介護 37 名(パート含),管理栄養士 1 名,
PT(通所兼務)2 名,作業療法士(通所兼務)3 名,ST(パート)1 名,薬剤師(パート)1 名,
施設ケアマネ 1 名,支援相談員 2 名,事務員 3 名,
･通所事業所の定員:40 名
・通所事業所の営業時間:月曜～土曜/9:00～17:30(日曜,祝日,年末 31 日～年始 3 日休業)
・通所事業所の登録者数:102 名(1 月末現在)
・通所事業所の一日平均利用者数:32 名(1 月末現在)
・通所職員数:医師 1 名(老健兼務),看護 1 名(パート),介護 13 名(パート含),PT(老健兼務)2 名
作業療法士(老健兼務)3 名

３利用者の状況及び今回の研究事業対象者

･登録者数:112 名
（支援 1:11 名　支援 2:33 名　介護 1:13 名　介護 2;27 名　介護 3:17 名　介護 4:8 名　介護 5:3 名）
･今回の研究事業対象者の選定方法:
①事業の内容や主旨の理解が可能であり,抵抗なく実施可能な利用者
②通所の利用状態が安定している利用者(休むことが少ない利用者)

４研究事業実施にあたって調整,配慮及び苦労,特別に取り組んだ点

【苦労した点】
･実施意図を対象者に理解してもらう事
･対象者以外の利用者に何をしているか尋ねられた際の研究内容の説明
･評価の方法,書式の記入方法の理解
【特別取り組んだ点】
･デイケア利用時に毎回家での実施状況を確認した
･家族との連携強化のため状況報告を頻繁に行った

４．医療法人りぼん・りぼん

１施設の地域概況

（地域特性,人口,高齢化率など）
九州の玄関口,北九州市は福岡県北部に位置する政令指定都市です.現在 7 区から成り当クリニックのある小倉北区は市の都心として位置づけらています.当施設はＪＲ小倉駅から車で 15 分程の旧商店街の住宅地にあります.市の人口はH22, 9 現在 981129 人,高齢化率 24, 8%で政令指定都市内では弟 1 位の高齢化率です.高齢社会に対応し病院,介護施設は多く存在している中で当施設は認知症患者を主に対象としてアプローチしています.

２施設の概要

・設置母体　医療法人　りぼん・りぼん
・組織概要　精神科無床診療所を母体に重度認知症患者デイ・ケア　2 単位（50 名）を中心に運営し精神科デイ・ケアや精神科訪問看護も少数ながら展開している.介護保険事業として通所介護,認知症対応型通所介護,在宅介護支援事業を運営している.
・職員（法人全体）　精神科医　2 名　看護師　4 名　作業療法士　6 名　精神保健福祉士　3 名
介護福祉士　9 名　介護支援専門員　1 名　事務職 3 名（内 2 名非常勤）
運転手　5 名（非常勤）
・　通所事業所の概要（定員,一日利用数,登録者数,営業日など）（H22,11 現在）
・通所介護　定員　10 名　1 日平均利用数　7 名　登録者数　21 名
・認知症対応型通所介護　定員　12 名　1 日平均利用数　7 名　登録者数　19 名
・営業日　両事業所とも日曜日,1 月 1 日以外は営業
・特徴　両事業所とも程度の差はあるが認知症の方が対象である.少人数のグループで家庭的な雰囲気の中で,その方らしく過ごしていただけるよう個別アプローチも重視している.

３利用者の状況及び今回の研究事業対象者

・介護度別登録者数
・通所介護　要支援２-1 名　要介護１-16 名　要介護 2-4 名
・認知症対応型通所介護　要介護 1-4 名　要介護 2-2 名　要介護 3-9 名　要介護 4-2 名
要介護 5-2 名
・今回の研究事業対象者の選定方法
週 2 回以上利用されている方で意思表示の可能な方及び家族の協力が得やすい方

４研究事業実施にあたって調整,配慮及び苦労,特別に取り組んだ点

・　担当作業療法士が利用者の利用日にできるだけ勤務できるように配慮したが全ての利用日には困難であった.
・御家族への説明やアンケートのため訪問や電話連絡をした.

５．介護老人保健施設　希の里

１施設の地域概況

（地域特性,人口,高齢化率など）
当施設は,大分県の北東部,国東半島の西側の豊後高田市にあります.市の人口は２４，５１４人で,
高齢化率 32.92 %と年々高齢化が進んでいます.市の有名な観光は,地元の商店街をそのまま取り込んだ昭和の町（昭和３０年代を回想できます）や夕日百選に選ばれた真玉の夕日などあります.

２施設の概要

・設置母体；医療法人　積善会
組織概要　千嶋病院（精神科病棟,認知症治療病棟）が母体病院であり,その他に精神科デイケア,グループホーム和の里がある.また,社会福祉法人 積善会　特別養護老人施設やすらぎの里,介護保険支援センターが隣接している.
・職員（職種と人数）
施設長（Dr）１名,入所（看護 11・介護 32）,通所（介護 13 名パート含む,相談員 1 名）,
リハビリ（作業療法士 3 名,助手 3 名）,事務 3 名,相談室（入所 2 名,居宅 3 名）で組織する.
・通所事業所の概要（定員,一日利用数,登録者数,営業日など）
定 員 ;45 名　（登録者数　102 名）
一日利用数；平均 33.7 名
営業日；日曜日,年末年始以外は実施.
時　間；8:30～17：00（6 時間以上 8 時間未満で運営）
サービス内容
機能訓練,入浴,作業活動（創作,手芸,料理,園芸,学習活動など）,レクリエーション,
季節行事,介護予防体操,介護相談,住宅改修相談など,利用者様のニーズに合わせたサービス提供を行っている.

３利用者の状況及び今回の研究事業対象者
・介護度別登録者数 要支援１；7名　要支援２；14名 要介護1；20名　要介護2；31名　要介護3；19名　要介護4；10名　　要介護5；1名 **・今回の研究事業対象者** 対象者６名（女性５名,男性１名） 介護度：要支援２　１名,要介護１　１名,要介護２　３名,要介護３　１名 疾患別：脳血管障害　２名　整形外科疾患　３名　　認知症　１名 **・今回の研究事業対象者の選定方法** 現在の生活場面で変化を与えたい（与える必要がある）が具体的な対策が出来ていない利用者を選定
４研究事業実施にあたって調整,配慮及び苦労,特別に取り組んだ点
①デイケア担当職員および担当ケアマネージャーに事業の目的,同意書,評価方法,マネジメントの仕方などの説明を行った. ②アセスメントや記入方法について作業療法士間での共通認識を図った. ③気候に左右するプログラムやマンツーマンでの対応が必要なプログラムがあり,その日の天候や人員状況を見て変更・中止などを行った.

６．介護老人保健施設　寿光園

１施設の地域概況
（地域特性,人口,高齢化率など） 宇部市の西側に位置し,施設の近隣は,10 年前は田んぼだけであったが,この 10 年で,商業地域の真っただ中になり,近隣には,大型スーパーや郊外型飲食店,マンションが建ち,大きく変化しました. 施設の高齢化率は 20.6%,宇部市の高齢化率（24.6%）より低いですが,高い状態です. 近隣には,上記のほか5㎞の中に,小学校が2校,中学校が2校,総合支援学校,保育園が3つと様々な世代との交流が出来る地域です.
２施設の概要
・設置母体（あれば）：医療法人　博愛会 ・組織概要　関連機関と定員：通所リハビリ（定員：50 名）は,介護老人保健施設（定員：80 名）の一つとして運営されています.同敷地内に,グループホーム和らぎ・歓び（定員：各 9 名）が設置されています. ・職員（職種と人数）：　看護師 2 名,介護福祉士 9 名,介護職 4 名, 支援相談員 2 名,運転職員 3 名,作業療法士 4 名,理学療法士 2 名,リハビリ助手 1 名（入所通所兼務） ・通所事業所の概要（定員,一日利用数,登録者数,営業日など） 定員：50 名 1 日利用数：　約 38 名前後 登録者数：約 120 名 営業日：　365 日（日祭日,年末年始も営業） 営業時間：9：30～１5:45 の６～８が基本です.
３利用者の状況及び今回の研究事業対象者
・介護度別登録者数：約 110 名 要支援１：12 名,要支援 2：21 名,要介護 1：22 名,要介護 2：25 名,要介護 3：23 名, 要介護４：13 名,要介護５：7 名 ・疾患別利用者数 脳血管疾患：42 名,整形疾患 29,認知症 18 名,その他 34 名 ・今回の研究事業対象者の選定方法 作業療法士 4 名で,話し合い, ・利用者さまが,研究事業の内容を理解出来る.（認知症は無） ・基本的に,家族と同居されている方,または,協力を得られやすい利用者さま ・作業療法士の担当が,作業に取り組みたいと思っていた利用者さま

４研究事業実施にあたって調整,配慮及び苦労,特別に取り組んだ点
・通常のプログラムに追加して行ったため,業務として時間的に難しいところがあった. ・研究事業への協力要請の説明文が難しかった為,一部文言を変えて説明をさせて頂きました. ・通常プログラムと並行して行ったため,普段行っていない活動を実施するということで,ご本人様に負担になっていないか,常に,気になっていた. ・当施設の環境の問題,自分自身の準備不足もあり,調理練習においては場所の確保や時間の調整に苦労し,予定していた回数の実施が難しかった.

7.介護老人保健施設みがわ

１施設の地域概況
（地域特性,人口,高齢化率など） 当施設がある水戸市は,茨城県の県央部に位置する県庁所在地である.人口は約 26 万 6 千人で,高齢化率は20.8%である.第 3 次産業人口率が約 74%の商業都市である.
２施設の概要
・　設置母体　医療法人大橋会 ・　開設　日　　平成 16 年 12 月 ・　組織概要　入所 100 名(短期療養介護含む),通所リハビリテーション 40 名 ・　関連機関　居宅介護支援事業所　訪問リハビリテーション ・　職員（職種と人数）相談員 1　介護士 10　作業療法士 2 常勤兼務　理学療法士 2 常勤兼務 ・　通所事業所の概要（定員,一日利用数,登録者数,営業日など） 〇営業日：年末年始以外営業 〇時間：4～6 時間,6～8 時間,1～2 時間,介護予防. 〇一日の流れ：バイタル確認→リハビリ・入浴・レクリエーション→昼食→リハビリ・入浴・レクリエーション→おやつ. 〇特徴：利用者の在宅生活への支援のために,家族や他居宅サービス事業者との連携を図っている.個別リハとして,身体機能向上を目的としたものだけではなく,対象者それぞれの希望を踏まえたアクティビティを行っている.
３利用者の状況及び今回の研究事業対象者
・　介護度別登録者数 要支援１：2 名　要支援２：９名　介護１：４９名　介護２：４６名　介護３：１１名　介護４：２名 介護５：１名　計 120 名 （・疾患別利用者数） 中枢神経疾患：52 名　整形疾患：42 名　呼吸器疾患・心疾患：15 名　認知症：8 名　難病：３名 計 120 名 ・今回の研究事業対象者の選定方法 特になし.
４研究事業実施にあたって調整,配慮及び苦労,特別に取り組んだ点
【苦労した点】 ・　介護職員によるかかわりなど,経過記録を毎回つけることが難しかった. ・　利用回数が少ない対象者では,体調不良等で休んでしまうと,評価やプログラム実施が進まず,十分な介入ができなかった. ・　介入時間が周りの利用者の個別リハよりも長くなってしまい,不満がでることがあった ・

８．袋井みつかわ病院

１施設の地域概況

・地域特性,人口,高齢化率

袋井市は,静岡県西部に位置し,東は掛川市,西は磐田市,北は森町に接している.また,東海道新幹線,東海道本線,東名高速道路,国道１号,国道 150 号など主要交通路が横断し,東京へは 240km,大阪へも 320km と交通条件にも大変恵まれている.当地域は,豊かに広がる田園地帯と美しい茶畑,さらには太田川や原野谷川,南には遠州灘と,自然環境にも恵まれている.当地域の土地利用は,平成 21 年現在で,宅地が 15.91%,農地が 34.87%,山林が 11.18%となっており,極めて平坦な地域が広がり,土地利用もしやすい条件が整っています.気候は,全国の中でも日照時間が長い地域であり,年平均気温も 16～17 度と１年を通じて快適な環境.平成 21 年４月における袋井市の人口は,約８万７千人で,平成 19 年度の出生率は,11.8 人（人口千人当たり）で県平均の 8.9 人より約２人上回っています.高齢化率は,平成 17 年 10 月１日現在で,17.2%と県の高齢化率 20.5%を約３ポイント下回っている.

２施設の概要

・設置母体：医療法人社団八洲会　（開院：平成７年１月）

関連機関：誠和藤枝病院,はいなん吉田病院

診療科目／内科・呼吸器科・消化器科・リハビリテーション科

病　床　数／２６０床（医療病棟　１５９床・介護病棟　１０１床）

療養病床／リハビリ棟／通所リハビリテーション棟）

職員：210 名

・通所事業所の概要

定員：なし,一日利用平均数：38 名,登録者数：96 名,営業日：月～土（祝日も営業）

３利用者の状況及び今回の研究事業対象者

・介護度別登録者数

・今回の研究事業対象者の選定方法

判断力やコミュニケションが保たれ,本人やご家族の協力が得られた方

４研究事業実施にあたって調整,配慮及び苦労,特別に取り組んだ点

家族が歩行や活動量向上を目的としている場合が多く,作業というより運動中心のメニューになりがちであった.本人の自覚と実際との解離が見受けられ,家族に協力してもらった.認知症でなくても難しいケースあり本人が夫にどう思われているかを気にしており,本人と夫やケアマネとの相談が不足しているケースあり

通所リハ 20 分で行うことの難しさ　⇒評価だけでの介入　⇒満足度が下がる

９．デイ・リハビリテーションセンター　イルカゆかい

１施設の地域概況

医療法人社団友志会は栃木県野木町にあり,栃木県の最南部に位置し,人口２万６千人のこぢんまりとした小さな町で始まり,病院や高齢者施設,保育園を運営している.野木町の高齢化率は 21.2%

２施設の概要

・設置母体　　医療法人社団友志会

・組織概要

医療法人社団友志会は,急性期病院,回復期リハビリ病院,介護老人保健施設,デイ・リハビリテーションセンター,介護予防フィットネスリハビリテーション,小規模多機能型居宅介護,グループホーム,訪問看護ステーション,ヘルパーステーション,居宅介護支援事業所を併設しており,医療福祉総合施設として,地域での一貫した医療・介護サービスを提供する施設を目指し相互の連携を図っている.

・職員（職種と人数）

看護：2 名　　介護：４７名　　相談員：2 名　　リハ：20 名（PT：１０名　作業療法士：９名　ST：1 名）

・通所事業所の概要

定員：１８４名　　一日利用数：139.4 名　　登録者数：４３４名　　営業日：年中無休

３利用者の状況及び今回の研究事業対象者
・介護度別登録者数 　　要支援２：0.2%　介護１：22.0%　介護２：31.4%　介護３：23.6%　介護４：14.8%　介護５：8.0% ・今回の研究事業対象者の選定方法 　　家族や本人が協力的であり,週 3 回以上利用されている方から選定.
４研究事業実施にあたって調整,配慮及び苦労,特別に取り組んだ点
本人・家族・ケアマネへの説明や連携に手間取った.自宅訪問が難しい点もあり,書面や電話での対応であったため,事業内容をわかりやすく説明することに配慮を要した. 　介入時間をゆっくりとることができず,体調の変化なども見られるため,ケースにとってベストなタイミングで介入することが難しかった.9 月からの開始であり,屋外での活動が目標となっている方は介入が難しかった. 　通所リハ利用者では,介入できる時間が限られてしまったり,利用日と出勤日が合わなかったりと,介入することが難しい点があった.担当作業療法士が休みの場合には,他の作業療法士に説明し情報の共有化が図れるように配慮した.

１０．尾形医院デイケアやませみ

１施設の地域概況
（地域特性,人口,高齢化率など） 　栃木県塩谷郡塩谷町は人口約 1 万 3 千人を有し,高齢化率は約 25%となっている.町内デイケアは当施設のみで,自然が多く残る地域である.
２施設の概要
・設置母体：医療法人社団たかはら会 ・組織概要　関連機関：訪問リハビリテーション,居宅介護支援センター,療養型病床 ・職員（職種と人数）：作業療法士 3 名（兼務）,介護職員 7 名（常勤）,3 名（パート） ・通所事業所の概要：定員：35 名,一日利用数：平均 25～6 名,登録者数：87 名,営業日：日曜以外（祝日も営業）
３利用者の状況及び今回の研究事業対象者
・登録者数：87 名（支援 1：9 名　支援 2：14 名　介護 1：24 名　介護 2：18 名　介護 3：13 名　介護 4：7 名　介護 5：2 名） ・今回の研究事業対象者の選定方法 ①　送迎時ご家族が在宅しており,ご家族との情報交換が比較的行いやすい方 ②　検証事業の趣旨が概ね理解できる方 ③
４研究事業実施にあたって調整,配慮及び苦労,特別に取り組んだ点
①　研究の趣旨の説明,介入経過に伴う家族への協力の依頼は,送迎の際に直接ご家族と情報交換ができるよう配慮した. ②　職員が事業の目的,同意書,評価方法,生活行為向上マネジメント方法の共通認識を持てるよう配慮した. ③

１１．株式会社メディケア・リハビリ

１施設の地域概況
大阪府全域； 面積 1,893.76k ㎡,人口約 880 万人,高齢化率 21.2%（平成 20 年度） 交野市； 大阪府東北部の北河内地域に位置する.面積 25.55k ㎡,人口約 8 万人,高齢化率 19.9%（平成 20 年） 一帯は郊外住宅地と田園地帯が混在する. 近年,JR 東西線の開通による利便性の向上と,自然環境の良さから人口が増加. 羽曳野市； 大阪府南東部の南河内地域に位置する.面積 26.44k ㎡,人口約 12 万人,高齢化率 17.3%（平成 16 年） ぶどうの生産で有名.また古墳などの古代史跡の多い地としても知られる.

平成 12 年度より「羽曳野市高年者いきいき計画」にて高齢者施策の方向性を定めており,平成 21～23 年は第 4 期にあたる.
門真市；
大阪府北東部の北河内地域に位置する.面積 12.28k ㎡,人口約 13 万人,高齢化率 20.5%（平成 20 年）
大阪市のベッドタウンを形成する衛星都市の一つ.農作物では蓮根が名産.近代以降,企業城下町として発展した.

２施設の概要

■設置母体
　株式会社メディケア・リハビリ：利用者総数 2619 名
■実施施設
・リハビリプラザ交野
職員：管理者 1,介護職員 7,看護師 2,作業療法士 2（内 1 名非常勤）
定員：20 名　　1 日の利用者数：平均 15 名　　登録者数 64 名
・リハビリプラザ羽曳野
職員：管理者 1,介護職員 9（内非常勤 5 名）,看護師 4（内非常勤 2 名）,作業療法士 1,PT1（非常勤）
定員：45 名　　1 日の利用者数：平均 40 名
・リハビリプラザ門真
職員：管理者 1,介護職員 7（内 3 名非常勤）,生活相談員 2,看護師 2,作業療法士 1
定員：30 名　　1 日の利用者数：平均 25 名　　登録者数：56 名
■通所事業所の概要
　パワーリハビリテーション,スリングセラピー等を導入したリハビリ強化型デイサービス.
営業日時：月～土 9:00～18:00（祝日営業）
1 日の流れ：送迎・バイタルチェック・入浴・食事・おやつ・介護・リハビリ・レクリエーション
・生活相談　　（入浴・リハビリは午前・午後どちらか選択）

３利用者の状況及び今回の研究事業対象者

■介護度別登録者数
・リハビリプラザ交野

要支援 1	要支援 2	要介護 1	要介護 2	要介護 3	要介護 4	要介護 5
19	8	5	11	11	3	0

疾患：脳卒中,糖尿病,整形疾患,難病,認知症,心疾患等
・リハビリプラザ羽曳野

要支援 1	要支援 2	要介護 1	要介護 2	要介護 3	要介護 4	要介護 5
26	29	22	55	22	16	6

疾患：脳卒中,整形疾患,糖尿病等
・リハビリプラザ門真

要支援 1	要支援 2	要介護 1	要介護 2	要介護 3	要介護 4	要介護 5
0	1	12	18	13	9	3

疾患：CVA,整形疾患,糖尿病,パーキンソン病,認知症等

■今回の研究事業対象者の選定方法
・手作業を趣味に持っていたが,疾患の発症や怪我,環境の変化で趣味が再開できていない方
・本人,家族,ケアマネージャーとも協力してもらえる方

４研究事業実施にあたって調整,配慮及び苦労,特別に取り組んだ点

・ご本人の主訴,家族の意向を含む目標設定を行ったが,家族とのコミュニケーション機会が少ない為,情報共有が大変であった.
・デイスタッフと情報共有し,全スタッフで取り組んだ.
・デイのプログラムに参加するか,研究事業のプログラムをするか,利用者本人に選択してもらったこと.
・利用者本人の達成感を得られるように,細かく設定するよう配慮した.
・計画をたてた後に体調の変化により,大きく計画を変更することになり,調整に時間を要した.
・周囲で見ていた利用者様も,対象者と同じようなプログラムをしたいと意欲的になっていた.
・本人の目標が高すぎて,短期での達成は難しいと思われる希望が多くあったので,そこから目標設定するのが困難だった.

１２．通所介護あしのさと

１施設の地域概況

施設は温泉街（芦原温泉）の外れの一戸建てと賃貸アパートが混在する新興住宅地の中にあり，隣は保育園，半径 500m内に郵便局，ホームセンター，コンビニ等がある．対象地域である福井県あわら市･坂井市の２市は東尋坊，丸岡城，芦原温泉など観光エリアとしても有名．人口 121,839 人，65 歳以上高齢者 28,641 人，高齢者率 23.5%．緩やかな過疎化が進んでいる．

２施設の概要

設置母体　営利法人　有限会社　なるざ

組織概要　・（訪問看護部）　訪問看護ステーションなるざリハビリサービス
・（通所介護部）　通所介護あしのさと
・（コンサルタント部）　他法人施設等へのリハビリテーションコンサルタント等

職　員　看護師２名，作業療法士１名（非），ＰＴ1名（非），介護福祉士３名（1名非），ヘルパー1名（非），栄養士１名（非）

通所事業所の概要　定員 15 名，一日平均 12 名利用，登録者約 35 名，
営業は 1/1～1/3 を除く平日（年間祝日 3 日間は実施）　利用時間 9：30～15：30（6～8時間）

特徴　①定員に対して職員数も多く，個別性が高い．コミュニケーションの機会を多く設定している．
②作業療法士が設計した機能的設備　③デイサービスだが全員に個別の機能訓練等を実施
④個別入浴スタイル　⑤居宅 13 か所からの依頼（居宅支援事業所を法人で持ってない）

３利用者の状況及び今回の研究事業対象者

介護度別登録者数　要支援１：2名，要支援２：5名，
要介護１：9名，要介護２：6名，要介護３：6名，要介護４：4名，要介護５：3名

疾患別利用者数　脳血管障害　16 名，膝関節症など整形疾患　4名，パーキンソン等神経疾患　6名，
糖尿病など内科疾患　2名，認知症　5名，廃用性症候群　2名

今回の研究事業対象者の選定方法
・研究事業に本人・家族とも協力が得られそうな方．利用が安定している．認知機能が保たれている．以上を基準に作業療法士個人の判断で選定．

４研究事業実施にあたって調整，配慮及び苦労，特別に取り組んだ点

・職員に対する研究の趣旨，目標と協力業務の内容を説明した．また，シートや評価内容の閲覧も行った．
・評価等にかける時間のねん出に困った．
・家族の協力や連絡以外に，環境を確認するために訪問が７名中６名必要だった．

１３．永生クリニック　介護サービス　スマイル永生

１施設の地域概況

（地域特性，人口，高齢化率など）
東京都の西にある人口約５４万人の八王子市に所在する．事業所近隣は坂の多い住宅街で，東京都心のベッドタウン的位置づけである．事業所のサービス提供範囲には，通所リハ２ヶ所，通所介護約 20 ヶ所程度存在する．八王子市内の高齢化率は約２２％で，事業所のサービス提供範囲の高齢化率は 30%を超えている状況である．

２施設の概要

・設置母体：医療法人社団永生会
・組織概要
永生病院を母体とし，永生クリニック，老人保健施設２ヶ所，訪問看護ステーション４ヶ所，包括支援センター，居宅介護事業所２ヶ所，地域包括支援センター，グループホームなどを抱えている法人である．スマイル永生は永生クリニックに併設されている３～４時間の通所リハビリテーションである．
・　職員：
通所リハビリテーション事業所の職員は，介護職２名，事務職１名，その他永生クリニックと兼務で曜日別にリハスタッフが１日平均３名程度所属している．

・通所事業所の概要
　サービス提供は３～４時間,午前午後の２単位制.１単位の平均利用者は１２～１３名程度.登録者は 118 名.曜日別でクラスわけ（要支援対応の介護予防クラス４クラス,介護１～３への対応として,活動クラス３クラス,運動クラス２クラス,失語クラス１クラス）している.

３利用者の状況及び今回の研究事業対象者

・　介護度別登録者数：要支援１：34　要支援２:18
　　要介護１:22　要介護２:25　要介護３：16　要介護４：0　要介護５：2
（・疾患別利用者数）脳血管疾患７割,整形疾患３割
・今回の研究事業対象者の選定方法
事業内容にある程度理解が可能だった方,及びこれを機会に自信をもつきっかけになって欲しいと思われた方

１４．せんだんの丘ぷらす

１施設の地域概況

（地域特性,人口,高齢化率など）
仙台市は人口約 1,030,000 人を有し,高齢化率は約 17%となっている.市内から少し離れた住宅街に位置する当施設の周辺３中学校区については高齢化率約 20%となっている.通所系事業所は,過当競争地域であり車で５分圏内に８事業所が密集し,サービスの差別化・多様化が事業の成否を握っている.施設周囲は,仙台市内を一望できる高台で,昭和 40～50 年ごろに造成された住宅地にある.

２施設の概要

・設置母体：医療法人社団　東北福祉会
・組織概要：当通所介護は,介護老人保健施設の在宅サービスの一角として運営をしている.東北福祉大学の関連法人である医療法人社団東北福祉会は介護老人保健施設,短期入所療養介護,通所リハビリテーション,居宅介護支援事業所,福祉用具貸与・販売事業,訪問看護ステーション,ホームヘルパーステーション 24,介護予防通所介護を擁しており,在宅介護支援,地域に根ざしたサービスを提供している.
・職員：管理者兼支援相談員　１名　　作業療法士　２名　　介護福祉士　常勤１名　非常勤１名
　　看護師　２名
・通所事業所の概要（定員,一日利用数,登録者数,営業日など）
　営業日：月曜～金曜（祝祭日は休み）
　登録者数：77 名（要支援 1:60 名　要支援 2:17 名）
　サービス提供時間：午前 9:00～11:00　午後 14:00～16:00
　利用定員：25 名
　一日の利用者数：約 15 名
　特徴：介護保険で行う通所介護は,対象者を要支援認定者とし介護予防に特化したサービスを提供.サービス提供時間を午前 2 時間,午後 2 時間の短時間型とし,運動器機能向上プログラムを実施.それにより,対象者の主体的な活動を支援している.また,仙台市の特定高齢者支援事業の委託を受け,運動教室を実施し,介護予防を積極的に行っている.

３利用者の状況及び今回の研究事業対象者

・介護度別登録者数：要支援 1　60 名　　要支援 2　17 名
・今回の研究事業対象者の選定方法
　通所利用が安定していて,協力が得られやすい対象者.

４研究事業実施にあたって調整,配慮及び苦労,特別に取り組んだ点

・利用者が研究内容を理解できず,こちらの意図しない行動をとる場合があり,調整,配慮が必要だった.
・普段は教室スタイルで,小集団での運動指導を行っていたが,個別の目標に対するプログラム実施のためケアスタッフに協力を頂いた.

１５．東郷外科はつらつデイケア

１施設の地域概況
（地域特性, 人口, 高齢化率など） 福岡都市圏・北九州市都市圏に属し, 両都市圏の 10%圏域に属している. 当初は北九州市を中心とする北九州都市圏のベッドタウンとして発展してきたが, 近年は福岡市を中心とする福岡都市圏の発展に伴い, 福岡都市圏への流れが優勢である. この地理的条件の良さからベッドタウンとして発展し, 人口が増加している. 観光資源が豊富で, かつて東郷平八郎や足利尊氏も参拝した交通安全の神様で勝利の神様的役割も果たす宗像大社もある. 人口は約 94000 人で, 高齢化率は 20%を越えている.
２施設の概要
・設置母体　医療法人隆三会 ・組織概要　通所リハビリテーション ・職員　作業療法士１名　介護職員４名　看護師１名 ・通所事業所の概要 定員 20 名　一日平均 14 名利用　月曜～土曜日（日・祝日休み）
３利用者の状況及び今回の研究事業対象者
・介護度別登録者数　要支援１・２　４名　　要介護１・２　10 名　要介護３　６名　要介護４　１名 ・今回の研究事業対象者の選定方法 デイケアに来て, 静かに過ごしており, 要望などがなかなか表面に出てきにくい人を対象とした.
４研究事業実施にあたって調整, 配慮及び苦労, 特別に取り組んだ点
対象者が１名であったので, 調整等に苦労はしなかった.